

札幌大学総合研究 第4号（2013年3月）

〈講演〉

ヨーロッパ史におけるアルザス＝ロレーヌ/ エルザス＝ロートリンゲン地域問題 ——地域・言語・国民意識——

石坂 昭雄

1. はじめに

今日は、久々に古巣の大学院にお招きをいただき、自分の研究の一端を院生の皆さんや先生方の前でお話する機会をつくっていただきまして誠にありがとうございます。お話がありましてから、テーマをあれこれ思い悩んだのですが、本研究科の共通の課題である地域問題、そして私自身の専門のヨーロッパ経済史の双方に跨ってできるだけ一般性のあるものということで、西ヨーロッパのなかでも一際ユニークな位置にあり、非常に複雑で錯綜した歴史的遺産を背負ってきた、フランス語ではアルザス＝ロレーヌ、ドイツ語ではエルザス＝ロートリンゲン¹⁾と呼ばれるこの地域の歴史と現状をお話したいと思います。

ここはライン河やモーゼル川というヨーロッパの大動脈、そして心臓部に位置し、フランス共和国の東部地域としてドイツと国境を接しておりますが、長年、独仏の領土争奪的になりまして、一七世紀後半からドイツとフランスの間で、ドイツ領時代が3回、フランス領が3回と両国を行き来したことで名高いところです。そのため、帰属が替わるごとに行政や教育の公用語や教育言語が一変し、また当該国の兵役義務が課せられて、特に第二次世界大戦では、両方の国に2度徴兵されて戦場に送られた住民も少なくありませんでした。

それは、この地域が、ライン河に面して地政学的にも、軍事戦略上でも極めて重要な位置にあり、フランスのライン河、そしてドイツへの進出の関門でもあったためでした。このため、この地域は一国内の地域問題にとどまらず、すぐれてヨーロッパ国際政治における重要な領土問題となりました。しかも、ここは、パリからみれば東部辺境かもしれませんが、西ヨーロッパの心臓部に位置し、もっとも経済発展が進み、資源や工業生産能力に恵まれ 所得水準も最も高い地域に属してきました。それだけに、この地域の帰属の変更は、フランスとドイツの関係国の経済全体に少なからぬ影響をもたらすことになります。(表1, 表2)

しかも、この地域の特殊性は、地域住民のドイツ語＝フランス語の言語＝文化問題と帰属意識、そして領有をめぐる両国の民族＝国民意識の対抗にあります。この地域は、人口の大部分は、母語としては、中世初期以来、隣接のドイツ諸地域とほぼ同じような（図1）、ヨーロッパ大陸ではフランス語とならぶ大文化言語であるドイツ語の方言を使用し続け、また宗教的にはカトリックが優勢ですが、プロテスタント、とりわけルター派も、アルザスでは人口の約1/3、地域によっては過半数を占めており、フランス国家にとっては常にフランスの中のドイツ的要素として意識・警戒されてきました。（表3）しかし他方で、フランスの長い統治を通じてフランス語とフランス文化、そしてとりわけフランス革命やナポレオン帝国以降のフランスの政治的変革と民主主義の理念は、この地域の住民の各層にいろいろの形で浸透しておりました。それゆえに1871年に新ドイツ帝国がこの地をフランスから割譲させてドイツ領としたのちも、第一次世界大戦後フランスがここを取り戻した後も、それぞれの国民国家のなかで少なからぬ火種を抱えることになります。

この地域が、ようやくその本来の役割を發揮できるようになったのは、第二次世界大戦の苦難を経て実現した、独仏の歴史的和解とヨーロッパ共同体の発足のお陰であり、その象徴としてこの地域の中心都市ストラスブールがヨーロッパ議会の所在地に選ばれましたが、さらにEU内の関税撤廃と移動の自由化、地方自治の進展のなかで、隣接したドイツやスイス、ルクセンブルク、ベルギーの諸地域との間で、地域連合が結成され、経済や文化の協力で模範的成果を挙げています。

このような、アルザス＝ロレーヌの現在の状況は、長い歴史の積み重ねのうで生まれたものであり、それをよく理解するにはこの地域だけでなく、ドイツやフランスの両国の国民の意識やナショナリズム、対外政策の枠組み、さらには諸列強の国際関係も含めて論ずる必要があります。そしてわが国では自明のこととされている国民国家や民族を改めて考え直すひとつの手がかりになることと思います。

そこで、今日は、非常に駆け足になりますがこの地域のドイツとフランスへの帰属の変遷の歴史とそこでの住民の国家との関連をみたうえで現在の文化・言語、そして経済問題を概観したいと思います。

II. 歴史

1. 中世からフランス王国への編入まで

この地域は中世以来、ドイツ帝国（神聖ローマ帝国）の一部で、アルザスの方はハプスブルク家の所領を除き強力な領邦はなく、夥しい数の帝国都市や零細な領邦に分かれていました。（図2）わけてもアルザスの中心都市であるシュトラースブルクは、西南ドイツ

圏切つての帝国自由都市で、名産のワインや小麦の集散地、毛織物や革製品の工業都市、ライン河とイタリアを中継する舟運業の中心地として、またロレーヌやリヨンの塩の輸入基地として発展し、ドイツ・ゴシック建築の最高傑作であるかの大聖堂（1225年—1439年完成）は、その繁栄のシンボルマークでもありました。そのほか皇帝から都市特権を認められた10の帝国都市が『十都市同盟』Dekapolisを結成して相互支援をしていました。このアルザス地方は一七世紀まで、ドイツ文化の発展にも非常に貢献しまして、かのゲーテンベルクも一時はシュトラースブルクに滞在してその印刷術を試みており、いまでもマインツと本家争いをしております。宗教改革でもシュトラースブルクはマルティン・ブツァーをリーダーとして西南ドイツのプロテスタントの中心勢力となり、牧師の養成機関として1566年に設立されたのが、シュトラースブルク大学の前身である学院で、1621年大学に昇格します。ところがアルザス地方は、三十戦争でたびたび戦場になり、末期にはフランスが介入して48年のウェストファリア条約で一部を領有し、その後の何度かの戦争で、頑強に抵抗してきたシュトラースブルク市も1681年に屈服させ、1713年のスペイン継承戦争までドイツ皇帝やその連合軍の奪回の攻勢を防ぎ切つてついにアルザス全体の領有権を確立します。〔図2〕（1515年にハプスブルク家の支配に対抗してスイス連邦の属邦となった都市国家、ミュルハウゼンやいくつかの神聖ローマ帝国所属の小領邦を除く）フランスは知事や軍の指揮官である総督のもと国境に強固な要塞を築いてフランス軍の大軍を駐屯させ、主要都市の代官、カトリックの司教、高等法院を任命します。しかしその統治は王国への完全統合でなく、特別区域として本国の関税線の外におかれ、在来からの法制や制度、ドイツ語やプロテスタンティズムの権利も尊重していました。こうしたフランス統治下で、フランスから派遣された高官と付き合う一部の上層市民は、経済的・政治的必要上、あるいはステータスシンボルとしてフランス語を覚えますが、一般市民や農民の間では、行政や宗教の面でも、日常生活での場でもまだ圧倒的にドイツ語が用いられておりました。1770年から71年にかけて、かのゲーテがシュトラースブルク大学法学部にフランス法やフランス語の勉強も兼ねて遊学したのは有名で、ここでヘルダーなどドイツ啓蒙主義者たちとの交友を深めたことはその自伝『詩と真実』に詳しいですし、彼はシュトラースブルク大聖堂に感銘して『ドイツ建築論』を書いております。また同じくこのシュトラースブルク大学で学んだのがライン地方出身の小貴族で後オーストリア帝国の宰相としてヨーロッパの国際政治に君臨した、メッテルニッヒ公爵です。

一方ロレーヌでは、フランスはメッス市＝司教領（1552年）やティオンヴィル（ディエーデンホーフエン、旧スペイン・ハプスブルク領のルクセンブルク公国領）、ザールルイなどの飛び地を次ぎ次ぎに獲得し強固な軍事的拠点を築きますが、大部分はなおナンシ

ーを首都とし形式上は神聖ローマ帝国に属する独立の領邦国家ロレーヌ公国が占めて、その東部、《ドイツ管区》*die deutsche Ballei, la baillage de l'Allemagne*では地方行政や教会でドイツ語が公用語として用いられていました。ところがこのロレーヌ公国は、その公太子のフランツ・シュテファン Franz Stephan がオーストリア＝ハプスブルク帝国の相続人であるマリア＝テレジアと結婚することになって、その宿敵のフランスが強硬に異議を唱え、その同意をうる代償として、1735年、君主メディチ家の断絶にともなって空位となったイタリアのトスカナ大公国と交換されます。フランス国王ルイ＝五世は、ロレーヌ公国を自分の岳父でポーランド王を逐われたスタニスワフ＝レシチンスキ Stanisław Leszczyński に与えて、その死後、これを回収し、1766年はじめてフランス王国に編入し、独仏国境はほぼ現在の通りになりますが、こちらもアルザスと同じく、独自の行政や関税区域が残されていました。(図3)

3. フランス大革命からフランスへの統合へ (1789-1871年)

このアルザス＝ロレーヌは、18世紀にはフランスのライン河の経済圏への窓口として一定の繁栄を遂げ、製鉄業、綿布捺染などの工業発展も見られましたが、旧体制の末期は、重い租税負担が大きな不満を生み出していました。このため、フランス大革命の初期にはアルザスやロレーヌは積極的にこれを歓迎し参加します。そして、農民は封建地代の無償廃棄と国有財産売却で多くが小土地所有者になることができ、他方、フランス王国のもとでもこの地方にまだ生き残って農民などから様々の賦課を取り立てていた領主や小貴族は一掃され、多くがドイツ側に亡命したまま戻らず、ここにドイツ本土とは著しく異なった反貴族主義的＝平民主義的社会風土が成立します。他方、社会的地位を高めたのがブルジョア＝名士層で、フランス革命の支持者となります。もちろん、革命が急進化するなかで多くの富裕な市民が反革命派として処刑されますが、1799年にナポレオンが登場してからは、フランスへの統合がスムーズに進みます。そして、ミュルーズなどの残っていた飛び地もすべてフランスに編入され、フランス全土なみに県・郡・市町村の中央集権的行政制度が実施されますが、経済的にもナポレオン帝国のもとドイツやイタリアの一部も含む高い関税障壁に守られた巨大市場が形作られ、フランスの海外＝植民地貿易が壊滅しヨーロッパ大陸(ドイツ諸邦やイタリア)に大きく転換したのにもなつて、輸出の便に恵まれたアルザスやロレーヌはライン川経由の貿易の窓口(さらには密貿易基地)になり、フランス帝国の輸出の1/3をも占めるに到り、綿工業でも一つの中心となつて強固なブルジョア層、親フランス的社会層が形成されます。また徴兵制で4万人以上が軍隊にとられますが、広い世界に触れて、概してナポレオンの戦争での武勲に誇りをいだいて故郷に戻

り、他のナポレオン支配下の諸地域のような兵役への嫌悪はあまりみられませんでした。そしてなによりもフランス革命で貴族出身の士官が多数亡命するか追放されるなか、下の階層から実力で多くのアルザス人が軍人として昇進していくわけで、アルザスだけで60名の将官を輩出、クレベール、ラップ、ムートン、極めつけはザールルイ出身の桶屋の息子で下士官から昇進したネー元帥で、こうした名将の銅像が現在もなおストラスブール、コルマル、プファルツブルク、メッスなどの諸都市の中心広場を見下ろし市民から郷土の誇りとして仰ぎ見られています。またアルザス出身の多くの官僚がフランス帝国で、とりわけその支配下に入ったドイツのライン左岸の諸県で行政官として活躍しました。ナポレオンの支配と収奪は、やがてドイツやイタリアで国民的反抗を生みだしますが、アルザス＝ロレーヌは、ドイツのこうしたナショナリズムの熱気、そして新しいドイツ文化運動からはすっかり遠ざかっていました。

なお、ナポレオン戦争後にはプロイセンやドイツのナショナリストの間からアルザス＝ロレーヌを、ドイツ語地域であることを理由にフランスから割譲させる動きが見られましたが、オーストリアが反対し、ウィーン会議の第二次パリ講和条約でも、ランダウやザールブリュッケン、ザールルイは失ったものの、フランスはなんとか大革命前のアルザス＝ロレーヌをほぼ保ち、今日の独仏国境線が確定します。その後は、アルザスとロレーヌは、フランス国家の枠の中で、経済的にも統合が進み、国内の交通インフラ、運河や鉄道網も整備され、さらに隣接のザール地方などのドイツやルクセンブルク、ベルギー、スイスとも国際鉄道路線で結ばれ、外部からの石炭の供給が格段に便利となり、またベルギーやドイツからも様々の企業家を迎え入れながら、大陸の中心的工業地帯に成長しました。その一方ドイツ語系である利点を生かして、企業家や熟練工によるドイツにたいする繊維工業や機械工業の技術移転の基地にもなりました。そしてその後も、多くのアルザス＝ロレーヌ出身者が、軍人としてのみならず、官僚や技術者、大学教授などの知識人としてフランス社会のなかで活躍します。

ところで、フランスの近代国民国家への再編のなかで本格的に進められたのが、行政、軍事の公用語だけでなく、教育言語のフランス語化、フランス語での義務教育の導入で、まず1833年法（ギゾー法）が人口500人以上の市町村に男子小学校、800人以上につき一校の女子校の設立を義務化しましたが、ついで1850年のファルー法は市町村に男子小学校は一つ、女子も可能な限り設置することを定めました。また師範学校が設立されて、小学校教員の養成が進められます。フランス政府がこのような本格的に実施に取り組んだのは、ドイツのナショナリズムの波及を恐れたからに他なりません。こうしたフランス語による義務教育は、この地域の一般の住民の子弟にとってはドイツ語方言の母語＝家

庭内言語と全く異なる言語によるものでしたから、学力向上には大いに問題があり、おそらく実際には地元出身の教師が、方言でフランス語の教科書を翻訳しながら教科を教えていたのだと思います。それでも、一般の小学生も高学年になれば一応フランス語を話せるようにはなったようです。ただし、社会階層による違いが歴然としていまして、ブルジョアの家では家でもきれいなフランス語を話していたのに対して下に行くほど訛りはひどかったといわれています。他方で書き言葉でもある標準ドイツ語は教えられないため、話すことも読み書きもできないままでした。こうした状況は、ドーデの『最後の授業』の情景を彷彿させるわけで、作者はここでもっともらしくドイツ風の名前をつけた人物を登場させていますが、村人や生徒たちが自分たちの母語とは無縁のフランス語だけの義務教育にこれほどの愛着をいだいたとは思われません。²⁾ (資料1) もちろん、この地域でドイツ語抜きでフランス語のみでの学校教育に対する批判がなかったわけではありません。教会に関してはカトリックでも、礼拝や聴聞はドイツ語方言でないといえられませんでした。ルター派ではなおさら、聖書のドイツ語からして信仰の一部だったわけで、ドイツ語の排除には強い抵抗がありました。また知識人の一部にも、ドイツとの絆が失われるという反対があったのですが、フランス語とフランス文化の優位は、1870年の戦争の頃には動かし難いものとなっていました。こうして、アルザス＝ロレーヌのドイツ語系住民は、その言語では方言＝話し言葉の世界に閉じ込められ、ドイツ知識人との交流も衰え、自らの知識人による支援を受けられないまま、今度はドイツへの併合を迎えます。

4.新ドイツ帝国への編入

1870年7月19日に戦端を開いた独仏戦争は、緒戦であつというまに趨勢がきまり、1871年5月10日のフランクフルトの講和でベルフォールを除くアルザスとロレーヌの東部が新ドイツ帝国に割譲されます。(図4)これら地域から講和条約審議のためボルドーの国民議会に選出された議員は残らず反対したことからわかるように、事実上の住民投票では圧倒的多数は反対の意思表示をしたのですが、敗戦の現実の前にこれを覆すことは不可能でした。ドイツ側がこれらの地域を併合しようとした動機は、大きくいって3つありました。一つは、ナポレオンからの解放戦争の際実現できなかったドイツ語地域の国民的統一の理想で、これはフィヒテ、ゲレス、アルント、グナイゼナウ、ヤーンに始まってその後ずっと、ドイツ・ナショナリズムのなかにくすぶり続けておりました。もちろん、自由主義者や革命家のなかには、ハイネやホイサーのように住民のフランス的自由への絆を理解して、ドイツ自身の改革がなければドイツ復歸に現地住民の支持はありえないと看破したものもありましたし、アルザス、とりわけストラスブールは皮肉にもプロ

イセン当局に逐われたゲレス自身の避難場所、ビュヒナーを始めとするドイツの革命家の亡命地、経済的にも就労機会ないし経済活動のチャンスでもあったわけで、1861年には42,000人のドイツ人が就労し——製鉄や炭鉱、綿工業、あるいはストラスブルなどに——居住していました。しかし、1860年代からのドイツ統一に向けての動きのなか、とりわけ66年のルクセンブルク危機の後、プロイセンだけでなく、南ドイツの新聞でも、また保守派だけでなく、国民自由党などの自由主義陣営からも併合論が活発に主張され、緒戦の勝利のあとはビスマルクもこれに逆らうのは困難になりました。いまひとつは、軍事的観点、ドイツ側からする今後の安全保障の要求で、これまで18世紀以来フランスのドイツ侵入の門ないし基地であったシュトラースブルクおよびエルザスをドイツの手に取り戻して国境をライン川から峻険なヴォージュ山脈まで押し戻す、それとは別にメッスの要塞、そしてそのすぐ西の標高差180メートルの高台を手に入れ、国境線をできるだけ守りやすくすることは、南ドイツ諸邦の強い要求でもあり、また参謀総長モルトケがプロイセン国王を強く動かしました。そこで、講和会議ではドイツ側の要求で国境線はいろいろの線引きの末メッスから15キロ西に引かれました。ちょうどその下にロレーヌ鉄鉱床が埋蔵されていて、これが第三の、経済的動機説と重なり合うのですが、ドイツがロレーヌの鉄鉱資源の78%、銑鉄生産の73%やアルザスの繊維工業地帯を奪ったことから（表1）、第一次世界大戦中からフランス側のプロパガンダでは、ビスマルクのアルザス＝ロレーヌ併合の最大の狙いが、鉄鉱山や工業地帯をフランスから奪うことにあった、とされました。これはその後のドイツの製鋼業の目覚ましい発展と重ね合わせて、歴史学の研究のうえでもしばしばこの戦争の戦争目的、重要な戦果として叙述されており、1971年には東ドイツと、西ドイツ歴史学界の論争になります。しかし、ロレーヌ鉄鉱床の併合が一部の鉱山官僚や行政官から提案されたのは事実ですが、まだトマス製鋼法の技術は未開発であったこの時点では、ドイツは貧鉱のミネット鉄鉱資源や製鉄地域の問題にそれほど大きな価値を認めておらず、何と言っても軍事的観点の方が決定的でした。

このように、ロレーヌのドイツ語地域を越えてメッスとその周辺、約20万人、アルザス＝ロレーヌの総人口約11%のフランス語地域（表4）をもドイツに併合するにあたっては、ロシアやオーストリア、イギリスから、ドイツ国内でもプロイセン皇太子やバイエルン首相からも懸念や異論が出まして、秘かにルクセンブルク大公国との交換案や賠償の10億フラン上積みによってファルケンベルクないしザールブリュッケンに代りの要塞を建設するなど代案も出されたのですが、さすがのビスマルクにもこれを実行するだけの力はなく、国際世論もこの時点では概してドイツの統一に同情的でした。有名な話ですが、イギリスの思想界の大物カーライルは、自ら1870年10月、メッスの開城直後、イギ

リス内でのアルザス＝ロレーヌ併合反対論にたいする反論を『タイムズ』紙に投稿してドイツの歴史的正当性——かつてのルイ14世などのドイツ侵略と領土併合の歴史に照らして——を訴えました。こうしたなかでは、イギリス首相グラッドストーンも閣内ですら住民投票提起の合意は取り付けられませんでした。とはいえ現地アルザス＝ロレーヌは、「ドイツ語を話していても、心はフランス国家に忠誠」といわれたように、ドイツ軍を歓迎せず、ドイツの新国民国家との一体感がなかったことは、占領直後にここを訪ねたテオドル・フォンターネなどのドイツの知識人を驚かせました。さらにドイツ側の、ドイツ語地域でありしかもかつてドイツに帰属していたという歴史的根拠による併合の主張は、ドイツとフランスの一流の学者を巻き込んで、国民とはなにかをめぐる、最後はかなりとげとげしい論戦になります。ドイツ側では強烈なナショナリストに転じたトライチュケは別格として、筋金入りの自由主義者でローマ史の世界的権威モムゼン、高名な歴史学者ランケ、神学者シュトラウスが、フランス側では、中世史家フステル・ドゥ・クーランジュ、ミシュレ、神学者ルナンなどが参加します。その主張は、アルザス＝ロレーヌの住民がたとえドイツ語の方言を話していてもフランス国家への帰属意識が強く、フランス国民であることを欲している、あるいは言語＝民族と国家領域はかならずしも一致しない、アルザス＝ロレーヌの住民はゲルマン系であるがドイツ人ではないとか、フランスにはフランス人以外にも5民族が暮らしている、など苦しい説明もありますが、つまるところ、国民とはなにか、住民の意思か民族＝言語かという点になります。ドイツ・ナショナリズムの立場からすると、ドイツ語の話されるところがドイツであり、すべて現地での住民の意思ではなくドイツ人の総意の帰結として統一されるべきある、ということになります。とはいえフランス側も、実は決して論理的にすっきりしていたわけではなく、かつて併合の際に住民投票をしたわけでもありませんし、その領土内の諸民族に住民の自決を常に認めているかという決してそうではありません。ともかくこうした状況や国際世論に鑑みて新ドイツ帝国はいくつかの点で他国には見られない破格の配慮をしています。まず言語面ですが、フランス語母語人口が50%を超える市町村では、初等教育や市町村の行政用語としてフランス語を認めるというものです³⁾。これはプロイセン領内のポーランド人やデンマーク人とは比べものならない寛大なものでした。さらに国籍選択の自由を認めまして、フランス国籍を選択した場合、動産は自由に持ち出し、不動産や企業の所有権をそのまま残していくことを認めます。（フランスから派遣されていた官吏や軍人はもちろんすべて引き揚げます。この方式は後、日本が台湾を清国から割譲させたおり援用されました。）申請締め切りのときのフランス国籍選択者は17万人でしたが、実際の出国者は、受け入れ先の証明が必要だったこともあって6万人まで大幅に減ってしまい、そのうち

5千人ほどが農業移民などとしてフランス植民地アルジェリアへ向かいました。その主力は知識人・医師、薬剤師、弁護士などの自由業、それに一部の商人や企業家などで、なかには実際はフランスではなく隣国のスイスやルクセンブルクに移り住んで近くから企業経営を監督したケースもあります。なお、フランス語のストラスブール大学は廃止されてナンシー大学がこれを引き継ぎます。こうしたなか企業家層は、ときにはフランス側にも工場などの事業所を新設し、しばしば一族が二つの国籍に分かれ、従業員も移住するケースもありました。最も有名なのがロレーヌ切って大製鉄企業のドゥ・ヴァンデル家の事例——国境から2キロのジュフに新しい製鉄=製鋼工場を新設した——です。その移住先としてとりわけベルフォールとナンシーが有名で、とくにガラス工業は、ドーム兄弟などロレーヌの企業家や労働者の移住で移植されたものが多いのです。その後大不況が始まり、失業が増大し、しかもドイツ帝国の徴兵制が施行されますと、これを嫌ってフランスに亡命する若者が増加します。ただし働き口がなく舞い戻った事例も数多くありましたが、全体としては流出が続きました。

さて、新ドイツ帝国は、この新領土の扱いをめぐる、国際政治におけるフランスの復讐と領土奪還の怨念もさることながら、内政面でも面倒な問題を背負うことになりました。というのは、新ドイツ帝国は、それぞれ内政は基本的に独立した、プロイセン王国以下25の諸邦の連邦国家で、しかも国土や人口でもプロイセンが単独で62と64%と圧倒的地位にあり、ドイツ皇帝はプロイセン国王が兼ね、帝国宰相は、プロイセン首相のビスマルクが兼任するという、非常に複雑な体制でした。フランスからこの地が割譲されたとき、統一に最後まで抵抗したバイエルン王国はこれを自邦の領土として要求しましたが、ビスマルクはこれを突っぱねます。こうして南ドイツ諸国も含めたドイツ統一戦争の旗印を掲げた以上、プロイセンに併合することもままならず、また独立の大公国創設や皇太子領や次子領とする独立邦の案も、合意が難しく結局とりあえず帝国全体の共同統治ということで《帝国領エルザス＝ロートリンゲン》が創設されました。この結果、住民はドイツ帝国の国籍は与えられましたが、連邦としての意思決定機関である連邦参議院に他の諸邦のように代表を出す権利はなく、皇帝の代理として総督が派遣され、そのもとで行政と司法が実施されます。議会はなく、諮問機関としての県や大都市の議会代表からなる《帝国領代表委員会》が設けられましたが、それは法律の提案権はあっても帝国議会と連邦参議院の最終承認に俟って初めて有効で、内政上は極めて限られた自治権しか与えられていない占領地域扱いでした。こうして帝国領の住民は、実質的にはプロイセンの支配下にありながら、かつてのフランス時代のように、プロイセンや帝国全土で活躍できる機会は享受できず、貴族や教養市民層が優位に立つドイツ社会で軍隊はもちろん官僚としての昇進の

道も塞がれていました。それだけでなく、逆に帝国領自体でも総督のもとでプロイセンをはじめ本土から多くの官僚が送り込まれます。そのなかには、シュトラースブルク市長となるバック⁴⁾やシュヴァイツァーが敬愛して止まなかったクルツィーウスFriedrich Curtius（ベルリン大学のギリシャ考古学教授で皇太子の師傅エルンストの長男）はじめ、すぐれた人材が含まれ、またフランス語や文化には、ドイツの支配層や知識人から高い敬意を払われ、それを話せることはステータスシンボルでもありました。街路名や看板などは当局の命令ですべてドイツ語化されましたが、フランス語の出版物が禁止されたわけではなく、フランス語による集会も大目に見られていました。フランスの演劇や美術展を、のちにはフランス映画も上映されて、ドイツの高級官僚やその家族も観にいったようです。ただし本土出身の軍人や下級官僚や警察官、憲兵、また企業の職員のなかにはエルザス人の方言を蔑視し、フランス文化との結びつきをフランスかぶれとして排斥し横暴な振る舞いを見せるものも多く、いろいろ軋轢は絶えなかったのは事実です。

フランス時代の法律は基本的には継承されますが、ついでに1810年に制定（52年8月に再度制定）された、本来はフランスの公共の安寧が危機状態のとき大統領が国民の諸権利の停止できる『専制条項』Diktaturparagraphまでも残され、平時でも適用されうることになり、出版や集会の停止も可能となりました。これは実際には3、4回しか発動されませんでした、無言の威圧効果を発揮し続けました。また、1887年に独仏関係が緊迫するなかフランスの奪回を期待する機運が高まり、帝国政府は1888年から、外国人、とくにフランスの国籍を選択した旧アルザス＝ロレーヌ人の里帰りやフランス軍現役将校、ドイツの兵役忌飛者にヴィザを課してこれに応えます。宗教面ではフランス第2帝政のローマ教皇庁との政教条約、そして教会の国家による維持と公立学校での宗教教育の自由はそのまま引き継がれます。ところで、帝国領の住民にも、ドイツ国民としての帝国議会の選挙権は与えられましたので、これは住民の不満の捌け口となります。1874年の第一回から1887年の選挙まで、いつも15すべての議席が、ブルジョアジーとカトリック派——新ドイツ帝国をプロテスタント的プロイセンによる支配の象徴として激しく反発していた——が手を結んだ、『エルザス＝ロートリンゲン党』を名乗る、抵抗派の地域主義政党が全選挙区で勝利し、ドイツ政府の面子は丸つぶれでした。ただし帝国議会そのものが限られた権限しかなく、しかも他のドイツ本土の議員たちからは併合反対の演説はまったくといって良いくらい反響はえられませんでした。一方地方自治体レベルでも、1873年、シュトラースブルクでは市長のラウトEdouard Lauthが私的な会合でフランスの復帰を期待する発言をしたとして罷免され、これに抗議した市議会も無期限に停会となって、同市の警察管区長官のバックが市長代行となりますが、バックのもとで、城壁や砦が撤去さ

れ、ようやくヴォーバン元帥以来の長年の要塞の鎧と中世都市以来の過密から解放され、さらに周辺の軍用の空き地が市に払い下げられた結果、都市計画が可能となり、北部に基盤目状の新市街が誕生し、王宮や政庁、鉄道や郵便の管理局、そして何よりも大学本館と大学＝国立図書館、さらにのちに邦議会議事堂、さらに新中央駅など、主としてベルリンの建築家の設計になるヴィルヘルム様式の壮大な建物が現在も使われ、これまで地方の要塞都市兼下ライン県の県庁所在地にすぎなかったこの町は、ひとつの邦国の首府として発展してゆきます。(図5)

さて、帝国政府は、領有後、ここでもすぐさま義務教育を完全に実施し、ドイツ語を教育言語としてフランス語に代えていきます。地元だけでは標準ドイツ語で教育のできる教師の数が足りませんから本土から送り込まれます。教師だけでなく、先に述べたように官僚、鉄道、郵便局員や企業の職員・技術者がドイツ各地からポストをえて、さらにはフランス語や現地の方言も解するルクセンブルク人も多数ここで働きます。ただ、近隣のバーデン、プファルツ、ザール出身者であれば、言語や感覚や風習が近く、法律でも共通のナポレオン法典でしたが、東のプロイセン東部からやってきた人間は、同じドイツ語でも外国語同然で全く通じず、住民との摩擦もいろいろ生じました。それでも師範学校での教師養成が一定の効果を上げると、それは地元出身の農民の子弟などの社会的昇進に機会にもなり、村の書記も勤めることで彼らの社会的役割が向上します。もちろん、ドイツ本土出身の教師の方言蔑視や師範学校や教育当局による愛国教育の押しつけがいろいろ反感を生み出すことはありましたが、標準ドイツ語による義務教育はかなりの成果を上げました。さらに公立の中等教育や高等教育はすべてドイツ語で行なわれ、なかでも早くも1872年にシュトラースブルク大学がドイツ語による大学として新設され、哲学、法学部、プロテスタント神学部(カトリック教会は独自の神学院Seminarを維持)、医学部、理学部と戦火で失った貴重な図書をドイツ全国、さらに世界中からの寄付で復旧した壮大な大学＝国立図書館を擁するこの大学は、新しい大学システムと研究設備でドイツにおける模範となり、初代事務局長(バーデンの大臣)ロッゲンバッハ男爵Franz Freiherr von Roggenbachが全ドイツ語圏から選りすぐった新進気鋭の122人の教授陣を集めました。経済学の分野でも、グスタフ・シュモラーとフリードリッヒ・ゲオルク・クナップ、そしてシュモラーの後任にルーヨ・ブレンターノ、さらにその後任としてザルトリウス・フォン・ヴァルタースハウゼン(August Sartorius von Waltershausen, 1888-1918)を擁して、ドイツ新歴史学派の拠点となります。そしてとりわけ自然科学関係では、教員からレントゲンをはじめ4人のノーベル物理学賞、化学賞受賞者を輩出します⁵⁾。しかし、きわめて高い学問的水準と世界的評価を誇るこの大学は、ドイツの大学の世界に向けての広告

塔ではあっても新領土へのドイツ文化普及の効果の点では成果がいまひとつでした。地元が切実に求め、また社会移動にも大きな効果を期待されていたのは、技術系あるいは農林系の中等ないし専門学校でしたが、これらを大学に併設する帝国領当局の計画は、古い大学理念にたつ教授たちの猛反対で潰え去りました。このようなドイツの大学制度や学生の気質や思考、そしていくつかの大学を移動するシステムは、エルザス＝ロートリンゲンのブルジョアの子弟には馴染めないもので、地元からの学生はようやく20世紀になって半数を超えました。有名な卒業生としては、なんといってもルター派の牧師の家に生まれた神学者アルベルト・シュヴァイツァー、後にフランスの外相となりヨーロッパ石炭＝鉄鋼共同体の産みの親となるロレーヌ人政治家ロベール・シューマンがいます。⁶⁾ 他方で一部ブルジョア層、とくにオーバーエルザスの場合は、なおフランス文化との結びつきを保ち、家庭でもフランス語を話し、フランス語をシック、ドイツ語を野暮くさいとして、ドイツ語による高等女学校を嫌って娘はフランスやスイスの寄宿学校に送ったり、息子もジュネーヴ大学やパリ大学などフランス語大学に学ばせました。農民の子女でも、多くがパリに女中奉公に出まして、すっかりフランス語をマスターしフランス文化に強く憧れるものも少なくありませんでした。

ところで先に述べたようにフランス語を母語とする地域には例外規定が設けられ、フランス語で初等教育が行なわれ、2年次からドイツ語が教授されていましたが、1887年に着任した視学官バオホEdwart Bauchの改革で、ドイツ語を外国語としてフランス語を通じて間接法で教授するようになり、1906年には、フランス語地域のブリュッシュ谷で児童は、ドイツ語をフランス語と同様に自由に話したり書いたりできるようになったといわれています。因みに1913年に朝鮮総督府が朝鮮での日本語教育の効果をあげるためこれに関心をもちまして、留学中の東京高等師範学校教授、保科孝一に調査を依頼しております。

抵抗派は、自らはドイツ国籍を取得したことへの言い訳もあり、フランス語教育を抵抗の象徴として政治的に利用して、代表委員会などで、繰り返し中等教育、師範学校のみならず小学校でもフランス語必須化＝2言語化を要求しましたが、総督府側は生徒に負担ないし混乱を招くという教育学的見地を楯に取って、小学校では全廃、中等教育でも文化や思想ではなく外国語として教授するにとどめようとして頑なに拒否します。

ところで、こうしたエルザス＝ロートリンゲンの地元の名士層やカトリック教会の旧抵抗派の姿勢は、90年代から変化を見せてきます。ひとつは、再度の戦争によるフランスの奪回の夢がもはや現実味を失ったことと、フランス共和国でカトリック教会と共和派の激しい争いの末、世俗化が進んだことのためです。1885年のジュール＝フェリー学校法で公立学校による無償義務教育と教会による道德教育の排除が決定され、そして1905年

には完全な国家と教会の分離が実施されます。このなかでカトリック教会は、当面の目標をドイツ帝国の枠の中での他の諸邦と対等な自治権確保に切り替えますし、帝国政府の側も住民に歩み寄っていきます。とりわけ、1900年のローマ教皇庁との交渉によって、プロイセン大学局長アルトホッフがシュトラースブルク大学の激しい抵抗を押し切ってまでカトリック神学部を設置し、それによって聖職者のドイツへの統合が計られました。同じく、シュトラースブルク大学だけでなくモムゼンやブレンターノを呼びかけ人とする全ドイツの多くの大学人が、学問の自由を守るために猛反対したのも顧みず同大学の近代史のポストがプロテスタントとカトリックの宗派別に二分され、中央党の領袖ペーター・シュパーンの息子である若いマルティン・シュパーンが教授に抜擢されました。彼はその期待に違わずカトリック勢力を中央党に結集するリーダーとして活躍し成功を収めます。

一方、1887年にドイツ帝国営業法が適用され、本土なみの工場監督官制度と労働者の団結権が導入されますし、1890年代からビスマルクの社会保険制度が導入され、労働組合運動を抑圧してきた《社会主義者鎮圧法》も1890年に、専制条項が1902年に廃止されます。さらに1888年から実施されてきたヴィザ条項も91年に撤廃されます。こうしたなかで社会民主党とその労働組合、さらに中央党系のキリスト教労働組合が勢力を伸ばしたことは、これまでのブルジョアジー＝名望家層の政治的支配力と企業における労働者への家父長制支配に大きな風穴を開けることになりました。また95年の自治体法で市議会には――プロイセンのような三級選挙制ではなく――フランス以来の普通選挙制が復活導入されまして、社会民主党が市議会に進出できました。これまでシュトラースブルクでは官選市長だったバックが改めて市議会から市長に選出されましたが、そのもとで、1900年から福祉担当の局長を勤めたのがクナップの許で学びフリードリッヒ・ナウマンの自由主義的社会改革思想から強い影響を受けたシュヴァンダー⁷⁾で、救貧＝社会福祉ではシュトラースブルク方式（名望家層や教区のヴォランティアーによる救貧事業、エルバーフェルト方式に代って市の職員ないし囑託が実施する）が、さらに労使代表同権の職業紹介＝労働争議仲裁＝調停機関、そして1906年にはドイツではじめてのベルギー・ヘント市の制度に倣った労働組合と共同での失業保険などが市議会の自由主義左派と社会民主党の支持のもと実現され、ドイツで一つの模範となりました。彼は1907年に社会民主党も賛成に回って次期市長に選ばれます。このとき、この管区の軍団司令官がこれを阻止しようと皇帝に帷幄上奏を行ないましたが、取り上げられませんでした。そして、さらに彼の下で、いろいろの公益事業が公営化され、とりわけ市営の市街電車路線網はライン川の対岸ケールも含む郊外までも延び、電気事業も第三セクター（51%株式所有のシュトラースブルク電力会社）によって隣接諸自治体を含めての広域で運営されました。都市計画でも、

過密で日当たりの悪い不衛生な旧市街のスラム中心部の再開発が進められ、150軒を取り壊して百貨店《Modern》を中核とするフランス様式の瀟洒な商店街（「新通り」Neue Straße, 現Rue du 22 novembre)の建設のため《大貫通》Der große Durchbruchが完了し、建設が開始されました。そして立ち退いた住民には、郊外のシュトックフェルトの田園都市に社会住宅が提供されます。

こうしたなかで、エルザス＝ロートリンゲン人とドイツ本土からの移住者の若い世代から、神学部の私講師であったシュヴァイツァーを中心にナウマンの社会改革的自由主義に共鳴する新しい、単に方言＝地方文化だけでなく独仏両文化の積極的融合と架け橋を目指す運動が生まれ、シュトラースブルク大学の経済学の私講師（後エルザス史＝地域経済の員外教授）で高名な農業史家ヴィッティヒWerner Wittich、後に東大経済学部の外国人講師となりマックス・ウェーバーの学問を日本に伝えた、ユダヤ系経済学者クルト・ジンガーKurt Singer、芸術史家のポラツェックErnst Polaczek、クナップの娘でやがてテオドル・ホイス（ナウマン派事務局長、ドイツ連邦共和国初代大統領）の夫人となるエリー、アルベルト・シヴァイツァーの活動を生涯支え続けた伴侶となるヘレーネ・ブレスラウ（シュトラースブルク大学中世史教授、ユダヤ系でありながらドイツ・ナショナリストであったブレスラウHarry Bresslauの娘）、経済史家カタリーナ・デーヒオと弟の美学者ルートヴィヒ（美術史教授Georg Dehioの子）などシュトラースブルク大学教授の子弟たちも参加し、シュヴァンダー市長の事業を囑託として支援していましたし、たまり場になったクナップ家に日曜日毎に集い、ブーハー⁸⁾とも交流があり、その編集する2言語雑誌『アルザス／エルザス画報』Illustrirte elsässische Rundschau/Revue illustrée alsacienneへの常連の寄稿者となりました。加えて社会学者のジンメル——学問的にはあれだけ高名でありながらユダヤ系であることも一因で長年ベルリン大学の員外教授に留め置かれきた——が1914年からやっこここの正教授に就任することになってこのサークルのリーダーとして大いに期待されていました。さらにルネ・シッケレ、フラーケ、シュタートラーなど、エルザス生まれの新世代による、方言や地域文化だけでなく積極的に広いドイツ語圏や世界に向けて発信しようとする『前衛』の文学運動のグループも誕生します。⁹⁾

なお経済の方は、ロレーヌ鉄鋼産業の目覚ましい発展に加えて、ライン河に新しいシュトラースブルク＝ケール港が築港されルール石炭の輸入の便が開け、工業団地が造成され、食品（ビール、ワイン、フォアグラ）や衣料、機械、自動車工業（ブガッティ）などが展開します。こうしてドイツ経済への統合は大きく進みます。鉄道も、もちろん軍事的動機もあるにせよ併合前の700キロから2000キロに延び、ヨーロッパで最も高い密度を誇りました。

こうしたなかで、とりあえずエルザス＝ロートリンゲンの地位を一定程度改善したのが、1911年の憲法で、正式に《邦議会》Landtagが設けられ、内政については立法権と連邦参議院における3票（バーデン大公国やヘッセン大公国とおなじく）の権利を獲得し、これによって地域の独自の政策と帝国での発言権、エルザス＝ロートリンゲン人の、邦の諸機関へのポスト確保と登用の道が開けました。この初の選挙では、地域政党は大きく後退し、代わって中央党と社会民主党の地域組織が躍進します。これは従来のブルジョア名望家支配が大きく揺らいだことを意味しました。そして、さらに各政党とも総督制度の変革と議院内閣制を次の改革目標に掲げます。ただしこのエルザス＝ロートリンゲンの地方自治と独立領邦化は、その住民の広いドイツ全体での官界、政界での活動の点では大きな制約を与えることになりました。

しかし、こうしたエルザス＝ロートリンゲンの自治とドイツ帝国への統合に冷水をかけ、これまでの様々の試みをぶちこわしたのが、1913年のツァーベルン事件——駐屯軍と住民の衝突事件——でした。¹⁰⁾

総じて、この47年あまりのドイツ帝政時代は、gut verwaltet, schlecht regiert(行政は優れ、統治は悪い)とうまく言い当てられたように、行政や経済面では優れた成果を残したものの、ベルリンの方針やドイツのナショナリズムの波に引きずられて、統治の方針がくるくる変わり、統合の好期を何度もぶち壊していましたし、身分意識の強い帝政ドイツは、結局、ブルジョアや名士層と妥協し、労働者や一般住民に経済的＝社会的昇進の道を開放するのを妨げ続けたといえます。

5. 第一次世界大戦

さて、こうしたなかで第一次世界大戦が勃発し、この地域が独仏の最前線に立たされると、複雑な帰属意識の問題を抱えるこの地方は、深刻な状況に置かれます。直接の戦場になったのは南西部の一角に限られていましたが、この地域は事実上の軍政の下に置かれ、ドイツの一般地域以上に情報管制が厳しく、また軍は、住民のフランス軍への共感を疑って——住民の徴兵忌避が多々起こり志願兵も少なく、3000人の壮丁がフランス側に脱走してフランス軍に志願しましたし、フランス在住のドイツ国籍のアルザス＝ロレーヌ人17600人がドイツの徴兵に応ぜずフランス軍に志願しあるいは脱走し、開戦直後のミュルハウゼン／ミュルーズにフランス軍が一時入城した時には歓呼の声で迎えたことで——強い不信感を持ち、徴兵された22万の大部分が東部戦線に送られました。もちろんドイツ兵としての連帯感が培われたケースがなかったわけでありませんし、エルザス＝ロートリンゲン出身兵士も決して脱走や反抗のケースが全国平均よりとりわけ高かったわけではあ

りませんでした。昇進も含めた軍隊内での差別もいろいろあったため、かのナポレオン戦争のような帰属意識どころか反感を募らせることが多かったのです。そして戦時下では帝国領の様々の独自の権利、とりわけフランス語=フランス文化関連の条項も勝手に蹂躪され、戦争にともなう窮乏と過酷な軍政が相俟ってついにはドイツの敗戦による解放とフランス復帰の願望を膨らませていくことになりました。他方で、フランスや連合国もこの地の無条件奪回をその戦争目的の筆頭にかかげ、最初こそ総司令官ジョッフル元帥名での布告でフランス復帰後のアルザスの伝統や自由の尊重を宣伝したものの、復帰に当たっての条件を意思表示する機会などまったく考慮されていませんでした。ドイツ側では、ようやく敗色濃厚な1918年10月14日に、すでに時遅しですが、マックス・フォン・バーデン内閣がエルザス=ロートリンゲンに独立邦国の地位を認め、最後の総督となったシュヴァンダーのもとで、エルザス=ロートリンゲン選出の帝国議会議員や邦議会議員などの政治家が、独立国家——ドイツにもフランスにも属さない中立国家も含めて——の新しい体制作りの構想を協議し始めた矢先、ドイツの11月革命はこの地にも波及し、シュトラースブルク大聖堂には赤旗が翻り、労働者=兵士協議会が設立されました。恐慌に陥ったブルジョアジーは、フランス政府にフランス軍に早期進駐を要請し、休戦協定でドイツ軍が撤退したあと、11月22日、フランス軍が予定を早めて、十分な準備もなくシュトラースブルクをはじめ各地に入城し、住民の熱狂的歓迎を受けます。

6.両大戦間期——フランス共和国への再編入。純化・同化・中央集権化——

さて、フランス共和国は、アルザス=ロレーヌを、住民投票や講和条約の規定に俟つことなく当然の権利としてフランス共和国に編入し、通貨をフランに切り替えます。その目標は、1871年以前の状態に戻すこと(「全力後進」*machine arrière*)にあり、戦時下の雰囲気のまま引き継いで、ロレーヌではドイツ系製鉄企業を接収(実質資産の割で「買収」しフランスの株式会社に再編)し、その他のドイツ資本の企業は国家の信託機関がその経営を引き継ぎます。1871年以降に來住したドイツ本土人や好ましくないアルザス=ロレーヌ人はフランス国籍を与えられず、休戦から2年間で10万人が30キロのトランクと2000マルクのみ携行を許されて2日以内に退去を命ぜられ、ドイツ国籍を放棄しなかったシュヴァイツァー夫人も例外ではありませんでした。そして1922年まで、合計14万人が混乱のさなかのドイツへ退去(その約1割がエルザス=ロートリンゲン人でドイツ国籍選択)しました。

しかしフランス共和国の軍や行政官の横暴、性急な行政や学校教育のフランス化は入城当初の熱狂をたちまち幻滅に転じてしまいます。本国のフランス人は、1871年後にフラ

ンスに移住した、あるいは世界大戦でフランスに与したアルザス＝ロレーヌ人の眼で勝手な像を描いて、住民の殆どがフランス語をしゃべっているものと誤認し、あるいはドイツの併合の根拠となったドイツ語を今度は決して許容するまいと決意している有様でした。しかも、フランス復帰当時、90%がドイツ語かその方言しか話せない状況でしたが、フランス政府は1919年に大学区長にチュニジアからが赴任してきたシャルレティの通達でフランス語の直接法による教育をあらゆる段階から強制しました。ドイツ語教育は小学校の最初の2年間は締め出され、小学校の3年生から週7時間のドイツ語による授業（うち4時間は宗教教育、3時間のみドイツ語）が認められました。6000人の教員のうち921人が追放され、残りも懸命にフランス語での授業を学ばねばならず、他方で本土から在外手当てにつられてドイツ語のできない若い教員が大量に赴任してきました。官僚、鉄道員、企業職員の上級職の2/3は本土のフランス人にとって代わられます。鉄道もフランス国有鉄道となり、運賃も給与水準も全国水準に合わせられ、地方的配慮は認められませんでした。大学も完全フランスの新大学——今度はフランスの大学の広告塔として——となり、ドイツ人教授は全員退去させられ、マルク・ブロックやリュシアン・フェーブル、モーリス・ハルプヴァックスなど人文・社会科学、自然科学の全分野で旧ドイツ大学に匹敵する逸材が送り込まれます。

フランス共和国は、過渡的制度として、三つの県と中央政府の緩衝機関としてアルザスおよびロレーヌ高等弁務官府を設置し、ミルランが初代の高等弁務官に就任しますが、ドイツの社会保険＝労働法の成果を高く評価していた彼は、フランスのモデルとするつもりで、《アルザス＝モーゼル地方特例法》によってこれを存続させます。

さて、戦争による疲弊とドイツ経済からの分離・フランス経済への統合は、この地方の経済に様々の混乱を惹き起こし、1919年にはドイツ革命の雰囲気染まった炭鉱や繊維工業の労働者のゼネストに発展し、ドイツ時代の労働者の権利を認めないブルジョア国家フランスに対する反感から、ドイツ国歌《Deutschland über alles》が歌われるまでになりますが、は軍の三人以上の集会禁止令を發布してストライキを鎮圧します。ただこの地域は、直接戦禍を蒙らなかったこともあり、また、ヴェルサイユ条約の規定で5年間ドイツへ戦前の平均移出量だけ無関税輸出する権利が与えられ、しばらくはこのアルザス＝ロレーヌの鉱工業の生産能力が、フランスの戦後復興を大きく支えました。

しかし、1924年急進社会党と社会党の左翼同盟のエリオ内閣が発足すると、アルザス＝ロレーヌの特別扱いは一切無くなり、高等弁務官府は廃止されて、県の各部門はパリの中央省庁の直接指揮の下に入り、わずかに総理大臣直属のアルザス・ロレーヌ管理部が残されます。そして、これまで実施を見合わせてきた、宗教教育の公教育からの分離を定め

たファルー法も本格的に実施され、政教条約は停止され、修道会系私立学校は禁止されました。

いまやカトリック教会と共和国とは地域をあげての《文化闘争》に突入し、カトリック勢力は、司教以下の全聖職者が結束して、そしてルター派も味方にしながら学校ストライキに訴えてこれを撤回させますが、これを機に中央政府の攻勢に対抗するため、右はカトリックから左は共産党地方組織までが連合した、《自治=郷土運動》が組織されます。アルザス=ロレーヌ人にとっては、帝政ドイツさえ許容してきた地方自治を民主主義国のフランスがなぜ否認し、政教条約による宗教教育の自由を侵害するか理解に苦しむものでした。さらにドイツ語文化も含む郷土固有の権利としての《郷土権》Heimatrechtの觀念が生まれます。ここには、カトリック系の旧中央党地域組織を引き継いだ①共和国人民連合UPR、ルター派地域やストラスブールの工業地域を基盤にした旧自由主義政党の流れを引き継いだ、世俗主義の②エルザス進歩党が共闘しているのですが、あらたに誕生した③《独立エルザス=ロートリンゲン地域党》Unabhängige Landespartei für Elsaß-Lothringen は、ドイツ領時代の教育を受け、ドイツ軍に従軍経験もある世代を中心に、最も急進的にドイツ語教育の復権とドイツ時代の地方自治の復活を要求し、自衛団を結成、1926年にはフランス共和国支持派との間で大乱闘（コルマルの血の日曜日）を惹き起こしました。そのなかには、独自の通貨と軍の設立やフランス共和国の保護国としてのエルザス=ロートリンゲン国家樹立、ひいてはヨーロッパ合衆国の枠の中での独立国家まで要求する様々の急進的分離主義ないし中立主義者を含んでいました。さらに注目すべきは④共産党のエルザス地域グループで、その指導者は1924年に下院議員、後1929—35年にストラスブール市長となるカール・フエバーCarl Hueberです。アルザス=ロレーヌの社会党が統合推進派だったのにたいして、共産党は統一不可分の共和国をブルジョア国家の統一原理として反対し、地域の自決原理を強く支持しました。

このようにカトリックから共産党まで幅広い党派を結集して1926年に設立されたのが、自治=郷土運動の連合組織である『エルザス=ロートリンゲン郷土連盟』Elsass-Lothringer Heimatbundで、その週刊の機関紙『未来』Die Zukunftは3万部の発行部数を誇り、うち定期購読は2万8千部であり、全世帯の十二分の一に及んでいました。

こうした《自治=郷土運動》の昂揚は、もちろんフランス共和国の同化政策での大きな失政に起因していましたが、加えてアルザス=ロレーヌ経済のフランス経済への再統合に失敗したことがさらに一段と不満を募らせました。これまでのドイツ市場はヴェルサイユ条約による五年間の経過措置の終了後は禁止的高関税で遮られ、ロカルノ体制の発足後も相変わらず続く独仏の「冷戦」状態のなかでは、ブリアンや国際連盟が構想した関税同盟

などまったくの夢でした。これに代わるべきフランス国内=植民地市場あるいは世界市場では、戦後の窮乏化した状況にあっては高品質のアルザス＝ロレーヌ製品は売れませんでした。そして約束されたインフラ整備でも、戦略的見地から、ライン河の側線運河建設とストラスブール港の拡充は実現したが、南フランスや植民地を結ぶライン＝ローヌ運河の拡張は予算がなく見送られました。

さて、こうしたアルザス＝ロレーヌの《自治=郷土運動》にたいしてドイツ政府自身がこの地域の再併合を狙って積極的な支援を与えたかという点とそういう事実はなく、また自治主義者もドイツ復帰を唱えたわけではなかったのですが、パリのフランス共和国政府やナショナリリストの眼にはそのような危険な運動と映り、1928年12月ついに中央政府は、ドイツ政府と連携しドイツ復帰を企んだ嫌疑で『未来』をはじめ3つのドイツ語新聞を発禁処分にし、22名の自治主義の指導者を逮捕・起訴しました。（コルマル裁判）しかし証拠は不十分で被告はドイツの関与を否認するなか、丁度総選挙を迎え、2名の被告が獄中から立候補し当選します。議会はこの選挙の無効を宣言しますが、代わりに他の自治派が当選します。結局裁判では5人が有罪、ただし懲役2年の軽い刑の判決で、それも結局恩赦で釈放になります。この一連のフランス政府の弾圧はアルザス＝ロレーヌ人の憤激を惹き起こし、国際連盟への提訴も計画され、続く市長選挙ではストラスブールとコルマルで自治主義派が圧勝します。しかし、このあと、世界恐慌とドイツにおけるナチスの台頭と政権把握のなかで、カトリック派は脱退し、共産党はアルザス自治派を切り捨て、自治運動は分裂し、一部はナチスに接近します。この間、1935年に、住民投票でザールのドイツ復帰が決定し、ロレーヌとザールとの経済関係は遮断され、アルザスも農産物市場を失います。恐慌で金融も機能麻痺に陥り、大戦の懸念からフランス資本は撤退し、あるいは投資を躊躇しており、経済はひどいデフレに低迷を続けました。なお、1936年の人民戦線内閣の成立は、また大きな衝撃となりましたが、義務教育を一年延長した際、アルザス＝ロレーヌだけはフランス語学習強化を狙ってほかより一年長い2年延長を定めたことが、地域の猛反発と地域運動の結集のきっかけとなりました。ただしこの件は、国務院が無効判決を下して、一応沈静します。

7. 第二次世界大戦——強制疎開、ドイツへの併合とナチス支配

さて、独仏の緊張が高まる中ついに第二次世界大戦を迎えるのですが、フランスは、マジノ線で防衛する構想のもと、開戦後の1939年9月、要塞線と国境の間の住民の強制疎開を実施し、37.4万のアルザス人と22.7万人のモーゼル県民は、30キロの荷物と4日分の食料のみ携行を許され、南フランスへ移され、全く慣れない言葉も通じない土地での苦難の

日々が続きます。以後1940年5月までアルザス＝ロレーヌでは両者が睨み合う『奇妙な戦争』状態が続きますが、電撃戦でマジノ線は正面だけでなく背後から攻略され、無人の地域となったアルザス＝ロレーヌはドイツ軍に占領され、6月22日休戦を迎えます。アルザス＝ロレーヌの住民は、再度フランスから見捨てられたという感じを抱きます。ドイツは疎開者とフランス軍に徴兵されたアルザス＝ロレーヌ人の復帰をフランス側に命令しただけでなく、講和条約をまたずに一方的にこの地方のドイツ国への編入を進めます。ただしヒトラーとナチスは、一部の自治主義者の期待はまったく顧みず、エルザスはバーデンと統合され《上ライン大管区》Gau Oberrhein、ロートリンゲンは、ザール、プファルツと一緒に《西部辺境大管区》^{ウェストマルク}Gau Westmarkに編成替えされます。そして、今度は徹底的ゲルマン化＝脱フランス化政策が実施され、フランス語やフランス文化の遺産はすべて容赦なく排除されます。占領とナチス体制に伴う様々の暴虐や圧政、画一化の政策のなかで、とりわけ深い恨みを残したのが徴兵で、ドイツ第三帝国に編入されたこの地の住民が徴兵され、なかにはフランス軍からやっとな除隊したものも含まれ、家族が人質同様に逃れることも困難でした。彼らはちょうど始まった独ソ戦のため東部戦線に送られましたが、なかには強制で武装親衛隊Waffen-SSに編入されたものもあり、戦争犯罪に荷担させられたものも出ました¹¹⁾。結局、13万人が徴兵されなかで、帰還できたのは9万のみで、死亡2.2万、行方不明1.8万を数え、捕虜となったものは長い間ソ連のタンボフ捕虜収容所に留め置かれ、そこでも死者を多数出し、帰還に非常に長い時間がかかり、その後も国家やドイツによる補償ありませんでした。

III. アルザス＝ロレーヌの戦後と現在

さて、連合軍による奪回とフランス共和国への復帰ののち、しばらくは、対独協力者の処罰、密告や告発、追放の嵐が吹き荒れ、2410件が刑事裁判に、8300件もの民事裁判による処分がくだされました。もはやドイツ語の使用の要求や地方自治は論外で、停留所には「フランス語を話そう」、あるいは「フランス語を話すのはシックだ」というスローガが掲げられ、ドイツ語やアルザス＝ロレーヌ＝方言は家庭内か内輪の住民同士に会話に閉じこめられ、公的世界ではまったく使うことができませんでした。1952年までドイツ語は小学校でも教えられず、幼稚園などで方言を話したものには罰札さえ課せられていました。地域史や地域文化史も、ドイツ史がそこに入り込むと理由で排除されます。新聞・雑誌もドイツ語単独のものは禁止され、最低25%はフランス語の記事、見出しのすべてと、スポーツ、青少年欄はかならずフランス語と規定されました。（資料2）

フランス共和国は、戦後も終始頑なに少数民族に対して国家語であるフランス語による

教育を強制し続けたのですが、世界の趨勢とレジスタンスにおける功績に鑑みての社会党のディクソン議員の尽力で1952年ディクソンDeixonne法が制定されます。それはブルトン語、バスク語、カタラン語、オック語など少数言語に対する一定の保護規定を設けたものですが、アルザス語、コルシカ語、フランドル語は、《屋根つきの言語》、すなわち外国の国家語であるとして適用外におかれました。これに対して真っ先に抗議の声を上げたのがコルシカ人で、1971年から結局その適用を受けますが、アルザス＝ロレーヌ人もやはり、ドイツ語－アルザス（エルザス）語の復権を要求し始めます。結局、1952年父兄と本人の同意のある場合のみという、一種の思想調査まがいのことをやったうえで、小学校の最後の2学年、4、5学年に週3回ドイツ語の教育が施行されますが、実際は、社会党系の教員組合の強い反対とサボタージュで、殆ど実施されませんでした。

こうしたなか、ドイツ語の理解者ないしアルザス語話者が衰退し、アルザスのアイデンティティーが消滅の危機に晒され始めました。ドイツ語新聞は、記者や編集者が得られなくなりドイツ人を雇わなければならなくなります。ここにいたってようやく2言語教育の要求が公に叫ばれ、1968年にルネ・シッケレ協会が設立されて、機関誌『邦と言語』Land u Sprochが創刊され、ポスターや絵葉書による啓蒙活動に加えて（資料3）、《二言語教育協会》のヴォランティアーによる幼稚園からの、エルザス語から入る二言語教育が課外授業として実施されるようになりました。時はちょうど五月革命、地域文化の見直しも始まろうとしておりました。こうしてようやく長い戦後が曲がり角を迎えます。さらに1971年の両県議会のアルザス語を地域言語として公認するよう要求し、1972年にはアルザス地域の教育長、ホルデリートGeorges Holderithの改革により、4年生と5年生に毎日30分アルザス語を使ってその潜在的能力を活用したドイツ語の授業が導入されました。しかしドイツ語教育開始年齢を3年生以下に引き下げる要望には、生徒が先にドイツ語話者になってしまうとして文部省が断固反対しました。これに刺激されてロレーヌでも、ルクセンブルクのルクセンブルク語の公用語への昇格と文法制定の後押しを受けてフランケン方言擁護運動Bei Uns Dahāmなどの諸団体が1975年に発足します。

1981年、ミッテラン政権のもと、アルザス両県議会が幼稚園での母語での教育と2年生からのドイツ語授業の要求し、1982年大学区長デーヨンPierre Deyon 通達で、ドイツ語をアルザス語の文章語として公認し、大学入学資格試験にアルザス地域文化の科目を追加、幼稚園から高等中学まで実験的に二言語学校を導入、ドイツ語教員の養成促進、バーデンの小学校との交流などの新しい事業が進められ、地域圏の権限強化でこうした試みに対する財政支援が容易になりました。そして、ようやくドイツ語（エルザス語、ロートリンゲン語）による看板や街路表示が復活し始めました。また、この地域の住民は普段から

ドイツのテレビやラジオに接していますから、ライン河の自然環境保護問題や原発反対運動などでは、ドイツ側からも大きな刺激を受けています。

こうした経過は、もちろん第二次世界大戦の終了から一世代経ち、あの権威主義＝軍国主義的ドイツが消滅して民主的な連邦国家となり、独仏の歴史的和解とEU統合が進み、ドイツやドイツ語敵視のタブーが和らぎ、国家の役割も相対的に低下した結果でもありますが、他方でドイツ語学習が、経済的に有利な状況を生み出している現実があり、そしてエルザス語話者は、ドイツ語の潜在的能力がフランス語しかできない他の住民より有利と考えられるようになったことがあります。そこで、現在の経済的環境に話を移したいと思います。

アルザスやロレーヌは、もともとフランス経済のなかではパリ圏について先進地域に入り、他の少数民族＝言語地域、たとえばコルシカとは比べ物にならぬほど裕福ですが、70年代以降、かつての基幹産業であるアルザスの繊維、旧型の肥料などの化学や機械工業、ロレーヌでも鉄鉱山、鉄鋼産業、石炭業、ソーダ工業が衰退して失業率が大きく高まりました。他方で、隣接するドイツのバーデンは、戦後多くの難民を迎え入れて、今日ではむしろルールをしのぐ経済成長を遂げ、また隣接するスイスのバーゼル都市圏も薬品＝精密化学など先端産業の世界最強の集積地として益々成長しております。そこで隣接するドイツやスイスへの越境通勤者や就業者が増加し、特にアルザス北部の市町村（ヴィッサンブール郡などは35%超）からカールスルーエ地域への、それからアルザス南部からスイスのバーゼル圏やバーデンのフライブルクへの越境通勤が顕著です。そこでは、就業機会が提供されるだけでなく賃金も高く、学歴からみて下位の職種でも喜んで就職する若者が増大してきました。それは平均で合計すればアルザスの就業者の8%にも及んでおります。（表5、6）それだけでなく、アルザスは、ドイツとスイスの企業の投資の舞台となり、全企業の31.5%が外国系ですが、うちドイツが45%、スイスが21%を占めています。（表7）これは地理的位置もさることながら、この地域にドイツ語話者が多いことが選択要因になっています。ロレーヌ東部（モーゼル県）では基幹産業であった鉄鋼・石炭産業が激しい危機と衰退、高い失業率の大波に見舞われているなか、隣接するザール地方は自動車産業や電子機器産業で持ち直しており、またザールブリュッケンはロレーヌ東部も含めたショッピング・センターとしても機能しておりますので、ロレーヌ東部（モーゼル県）の就業人口の25%をこうした越境通勤労働で雇い入れています。ただし、こうしたロレーヌからザールへのフランス国籍の越境労働者が高齢化し、また標準ドイツ語を学習したことのある古い世代が退職し、他方で炭鉱が閉山に見舞われたことによってロレーヌのドイツ語方言文化の衰退は著しく、フランス語しか習わなかった若い世代が増加するにつれ、ロレーヌからの越境通勤労働者数は停滞が見られ、その分、フランス語とドイツ

語の両方が公用語であり、また方言も共通のルクセンブルクがますます越境通勤や移住の対象として好まれるようです。（表 8，図6,7,8）

なお、アルザス＝ロレーヌとドイツの経済的交流のいまひとつの要因として、ドイツ人やスイス人によるアルザスやモーゼル県隣接地域での不動産購入が挙げられます。1990年のシェンゲン協定以降加速的に、ドイツに比して地価が30%－50%，建築費も30%安く、住民税も低く教会税もないアルザスには、ドイツ語方言が共通なこともあって、多数のドイツ人やスイス人が移住し、そのうち5400人がドイツへ越境通勤しています。ロレーヌでも同じように約5000人のドイツ人が居住してドイツに通勤しています。ただし、これらドイツ人については、態度が傲慢であったり、地元の住民と溶け込まない、子供はスクールバスでドイツの学校に通わせるなど、いろいろ反感を買うケースもでてきていますが、それでもフランス語の勉強のため地元の小学校を選択するケースもあり、地方自治体選挙権解放も与って住民同士の融合が今後否応なしに進んでゆくものと思います。

ただし、企業で働くための会話は、ドイツ語方言話者にはすぐマスターでき、この点では有利な条件ではありますが、工場単純労働を超えた上位の有利な職種に就く、あるいはサービス産業に就労するためには、学校で学ぶ標準ドイツ語の読み書き能力は不可欠で、今後とも学校での標準ドイツ語学習の強化が必要となってきます。

さて、EUのもとで、国家間の全体的協力とはべつに、隣接地方自治体や地域の協力が試みられるなかで、アルザスでも隣接地域のバーデン、南プファルツ、さらにEU加盟国ではないスイスのバーゼル地域を含めた、国家領域を超えた地域間の経済ないし文化協力事業は、1960年代から戦争後のこれまでのいろいろのわだかまりや障害を乗り越えて部分的にスタートしましたが、1990年代から、EUの、いわゆるInterregプログラムの支援により、これまでの3つの部分的な地方自治体連合を統合した《上ライン・ヨーロッパ地域》EuroRegion Oberrheinが結成され、EU構造基金の支援により、ともすれば国境ごとの分断が障害となってきたこの地域全体の潜在的能力の活性化に取り組んでおり、高い研究水準を誇るこの地域内の4大学の協力のもと、バイオを中心とした新産業育成と集積、教育・職業資格の共通化のプログラムに取り組み、また越境通勤の増大に対応して電車やバスなどの国境を越えた交通網の整備・改善にも協働しています。こうしたなかで、両言語を駆使できるアルザス人とスイス人は、しばしばドイツ人やフランス人双方の、政府や企業関係者の橋渡しに重要な役割を演じています。一方、モーゼル県の方も、1960年代から隣接のザール地方やルクセンブルクとの国境をこえての自治体相互の、あるいは関係地域全体での協力関係を築き、1990年代から《ロレーヌ地域圏》全体とドイツのザール州や、ラインラント・プファルツ州、ルクセンブルク大公国、ベルギーのワロン地域

を含めた《大地域圏》Großregionを結成して、鉄鋼・石炭産業が衰退した不況地域からの脱却と新しい産業基盤の形成のために協力しています。

IV おわりに

さて、私たち後世の歴史家はその特権として、このアルザス＝ロレーヌの洵に波乱に満ちた歴史をいろいろ振り返りながら、その歴史的可能性を探ることが許されますが、とりあえず今後のヨーロッパの他の国々との比較史的課題としても重要な次の2点を提起させていただきたいと思います。

まず、もしアルザス＝ロレーヌが旧体制のもとで、あるいはウィーン体制後フランスの領有を離れ別の領邦や独立国家となっていた場合、あるいはザールルイやランダウのようにいずれかドイツ諸邦に組み込まれた場合、フランス語とドイツ語や国民意識がどう展開したか。スイスのように独自の国民意識が生まれたか、また、一旦はフランスのナポレオン帝国に併合されましたが、1830年のオランダからの独立革命の際フランスへの統合を選ばず結局独立国家の道を歩んだベルギーのフラーンデレン——そこではフランス語話者であるブルジョアジーの政治的＝文化的支配が覆されて現在の状況にいたっているのです——と比べてなぜこのような違いが生まれたか、この点は尽きぬ関心を惹きつけます。

いまひとつは、1871年以降のドイツ領時代の問題です。この《帝国領エルザス＝ロートリンゲン》が他のドイツ諸邦と対等な連邦構成国に昇格して完全な内政的自治権を獲得し、イギリスの自治領のように総督のもとでも普通選挙権と議院内閣制、そしてフランスに先んじて社会政策の模範となり労働者階級を包摂しつつブルジョアの名士層の優位を覆すことも、ひとつの可能性としてはありました。シュトラースブルク大学教授としてエルザス＝ロートリンゲン問題を肌で感じ、またナウマンの支援者でもあったクナップやブレンターノのような社会改革派の夢は、部分的にはその弟子シュトラースブルク市長シュヴァンダーのもとで先駆的成果を残しました。

自己改革の能力がなく、身分制の極めて強く、結局親フランス派の名士層と妥協を続ける帝政ドイツ＝プロイセンの下、しかも、独仏対立と軍国主義の優位のなかですが、第一次世界大戦が始まらなければ、帝国領がどのような道を歩みえたのかは、その様々の可能性を改めて拾い出す必要があります。

(本稿は、2011年3月11日におこなわれた、大学院経済学研究科主催の講演会の記録である)

注

- 1) ロレーヌ(ロートリンゲン) 東部のドイツ語地域 (Ost-Lothringen, Deutsch-Lothringen, la Lorraine thioise) とアルザス (エルザス) は、長年峻険なヴォージュ山脈で隔てられて相互の交流も乏しく、行政上もドイツ併合までは全く別の地方で、ドイツ語方言も前者が中部ドイツ語のフランケン語系にたいして後者は高地ドイツ語のアレマン語系で、住民意識にも、一体感はなく、産業構造からみても前者が石炭・鉄鋼、ソーダなどの重化学工業を基盤としていたのに対し、後者は繊維やそれに関連した機械・化学、食品など軽工業が中心であった。
- 2) ちなみにこの作品は早くも明治35年に尾崎紅葉が『新小説』に英語から全訳紹介、鈴木三重吉の訳が大正に刊行、そして1936年櫻田佐の訳が岩波文庫に入ったが、わが国では、この作品の持つ意味と歴史的状況を十分に理解しないまま、「国語愛」の物語として、戦前はもちろん、戦後も昭和33年から40年代にかけても、多くの小学校や中学校の教科書に無批判に掲載され、また、フランス語の初級テキスト——ドイツ語でのシュヴァイツァーと並んで——としても、戦前・戦後とも、旧制高校や新制大学教養部で広く使われ人口に膾炙してきた。それを決定的に批判したのが、言語学者の田中克彦氏の岩波新書『ことばと国家』（1981年）で、さすがに1986年以降は、世界的な少数言語復権や保護の潮流もあって、もはやそのような脈絡では教科書に載らなくなった。
- 3) また、フランス時代の、軍人や戦争の銅像や記念碑なども、ナチス占領時代とは異なってできるだけ保存・維持され、1909年には普仏戦争におけるフランス軍戦没者記念碑(ヴァイセンブルク)の建造さえ許可された。そして、7月14日のフランス革命記念日には、多くのエルザス＝ロートリンゲン人が国境で殆ど検問を受けずにナンシーやベルフォールで祭典に参加していた。
- 4) バックOtto Back(1834 in Kirchberg/Hunsrück-1917 Straßburg) ボン、ベルリン大学で神学と法学を学んだのち行政官として勤務、ジンメルン郡長、1870/71年戦争に少尉として従軍、1872年にシュトラースブルク警察管区長官、シュトラースブルクのラウト市長の罷免後、1873—80年市長代行、1880-86年、ウンターエルザス県知事、1886年シュトラースブルク市長、1895年に自治体条例施行を承けて、市議会より市長に選出。都市計画や公共交通、公益事業整備に功績。1907年に退任。1910年、シュトラースブルク大学事務局長、1911—17年まで、エルザス＝ロートリンゲン邦議会上院議員および議長。
- 5) とりわけ医学部の国際的評価は高く、1880年および81年に東京帝国大学医学部を卒業しドイツに官費ないし私費で留学した第一期、二期生のうちから三人、佐藤政吉、小金井良精（作家、星新一の母方の祖父）、高橋順太郎がシュトラースブルク大学に3年まなび、帰国後それぞれ第一内科、解剖学、薬物学の初代日本人教授に就任しており、その後も多くの留学生がここで学んだ。
- 6) シューマン、ロベールSchuman,Robert (1886-1963) 父は、ルクセンブルクとの国境のエヴ

ランジュEvrangle/Evringen在住のロレーヌ人で母はルクセンブルク人。ドイツ国籍を選択したが、ルクセンブルクに移住、ロベールはルクセンブルク市郊外クラウゼンで生まれた。高等中学までフランス語での教育を受けたが、ドイツの大学入学資格をうるため、メッスのギムナジウムに入り直し、その後、ボン大学、シュトラースブルク大学で法学を学んで弁護士の資格を取得、メッスで開業の傍ら市議会議員を務めた。

7) ルードルフ・シュヴァンダーRudolf Schwander(Colmar 1868-Kassel 1950) エルザスのブルジョアの庶子に生まれ、コルマル市役所で吏員として働いた後、夜学で勉強し大学入学資格をとり、シュトラースブルク大学でクナップやザルトリウス・フォン・ヴァルタースハウゼンの指導もとで学び国家学で博士をえて、1900年からシュトラースブルク市役所で、福祉局長兼助役としてバックのもとで功績をあげ、1907年にその後任として弱冠39歳で市長に就任。1917年から短期間ながら、帝国経済省長官を勤める。1918年最後の帝国領総督。ドイツ敗戦後、ドイツに移り、1919年-30年に、プロイセン自由国ヘッセン=ナッサウ州の知事。

8) ピエール・ブーハー (1869Guebwiller/Gebweiler-1921Strasbourg) シュトラースブルク大学医学部に学び神経科と小児科医としてシュトラースブルクで開業のかたわら、《アルザス博物館》の設立に尽力、『アルザス画報』の主筆として、アルザス文化のアイデンティティ擁護のため活躍し、若い知識人のリーダーにもなった。第一次世界大戦勃発とともにドイツ陸軍予備軍医の彼はドイツへの従軍をきらいスイスに逃れ、フランス軍で宣伝活動に従事。

9) ルネ・シッケレ (1882Oberehnheim/Obernai-1940 Vence) エルザスの葡萄農園主で警察官僚だった父と、ペルフォール地区出身のフランス人で、ドイツ語もアルザス語も全く理解しなかった母との間に生まれた。シュタートラーやフラークなどと、新しい文学運動の雑誌、『前衛』Der Stürmerを創刊 大戦勃発後は、スイスで、独仏和解に努める平和活動に従事、ワイマル期はベルリンに本拠を移し、ドイツ人の妻と結婚したが、ナチスの政権掌握後、フランスに亡命。戦争勃発直前に死す。

10) 1913年、ツァーベルンに駐屯していた第19軍団第99歩兵連隊の若い少尉、フォルストナーLeutnant Günther Freiherr von Forstnerがその訓辞で 徴兵で入隊したエルザス人新兵のことをWackes(ならずもの)と謗ったと新聞に暴露され、外出のたびに民衆に囲まれて罵倒された。連隊長のロイター大佐が、この際民間人を不当に拘束するという越権行為にでて民衆に怒りを買い、さらに独断で郡長マールの諫止を無視して戒厳令を布き、その措置を皇帝も、また帝国宰相ベートマン=ホルヴェークも結局追認し、軍法会議も二人に無罪を言い渡したことは、一地方駐屯地での衝突、あるいはエルザス=ロートリンゲン問題を越えて、ドイツ帝国における国家と軍の関係の根本をゆるがす一大問題と化し、エルザス邦議会だけでなく帝国議会の圧倒的多数から弾劾され、ドイツの軍国主義を世界に宣伝させる格好の材料となった。

- 11) なかでも衝撃を与えたのが、オラドゥール事件〔子供100人をふくむ624人を親衛隊「ドイツ国」師団Das Reich、フューラー（総統）連隊第3中隊が、レジスタンスへの報復として殺害〕裁判で、1954年起訴された戦争犯罪者のなかに14人のアルザス＝ロレーヌ人が含まれていたことである。そのうち13名は国防軍志願兵で武装親衛隊SSに強制編入された兵士であった。これに対し、アルザス＝ロレーヌ人は地域を挙げて共産党からカトリックにいたるまで党派を問わず激しい抗議に立ち上がり、命令に従わざるをえなかった被告の無罪を主張、フランス国論も、大きく分裂したが、SSに志願した軍曹のみ死刑、残りの被告は、5～7年の禁固ないし懲役刑の判決が出された。（のち恩赦）

資料

1. 『不羈の選挙人』 Der souveräne Wahlmann (1869)

そしてナポレオン三世が英仏通商条約を締結したとき、何人かの工場主たち、そのなかには、1871年以降、ドイツにたいする激しい抗議派として一際目立つ人物も含まれていたが、労働者向けに『不羈の選挙人』という題の新聞を発行した。その原理はフランス革命の原理であった。だがそれはドイツ語でのみ発行されていた。その「なぜか」は、新聞自身が答えていた。『それは端的に次の理由によるものである。エルザス住民の多数、しかも圧倒的多数は、ドイツ語で考え、ドイツ風に感じ、ドイツ語を話し、ドイツ語の宗教教育を受け、ドイツ的風習のままに暮らしているし、決してドイツ語を忘れようとしめない。もちろん知っての通りフランス語を読み書き話す人間は多数いるが、それでもフランス語に習熟しているものでも、ドイツ語で考え、感じ、話す。それゆえわれわれは彼らのところに赴き、その母たちの言語、子供時代の言語、貴方がたの子供たちを可愛がり教育する言語、貴方がたの妻を抱きしめ、彼らの死に行く両親を慰める言語を使う。』Lujo Brentano, *Mein Leben im Streit um die soziale Entwicklung Deutschlands*, 1931, S.127 石坂昭雄他訳『わが生涯とドイツの社会改革』（2008）、141の引用による。

2. André Weckmann, “Schang d'sunn schint schun lang” , *Petite Anthologie de la poésie Alsacienne*, Strasbourg, 1975 アンドレ・ヴェックマン／金子亨訳「白くしゃべろ」

「白くしゃべろ、黒人よ。白は気高い。白は美しい。白は立派だ。白はフランスだ。フランスは白だ。白はシックだ。

アルザス人よ、アルザス人はそうじゃない。そいつは原始的で下劣だ。クソッ。

だから白くしゃべろ、黒人よ。イル黒人、ブリッシュ黒人、現代黒人。だから白くしゃべろ、パリみたいに。

そしてお前の黒い言葉をフォルマリン漬けにして博物館におくちまえ。

だから白くしゃべろ 黒人よ 白くなるために 遥かに白く立派に、白くシックに。パリのよう
に白くなるために。」 金子亨（1999）、125。

3. ルネ・シッケレ協会のポスター

孫：（フランス語で）「おじいちゃん！ どうしてアルザスにはもうコウノトリはこないの？」

祖父：（アルザス語で）「坊や。いいかい、コウノトリがアルザスの上へ飛んできてでもフランス語ばかりしゃべっているのを聞くと、まだつかねえんだなと思って飛びつけて行っちゃうんだよ。」

孫の脇にはフランス語で「アルザスを汚すな！」祖父の脇には「二言語使用。これこそわれらの未来」、下には「子供たちにアルザス語を教えよ！」のアルザス語スローガン。金子亨（1999）、130。



4. アルザス／ロレーヌ関連独仏地名対照表

標準ドイツ語		フランス語	
エルザス	Elsaß	アルザス	Alsace
ロートリンゲン	Lothringen	ロレーヌ	Lorraine
ブロイシュ谷	Breuschtal	ブリュシュ谷	Vallée de la Bruche
ディーデンホーフエン	Diedenhofen	ティオンヴィル	Thionville
ゲーブヴァイラー	Gebweiler	ゲーブウィレル	Guebwiller
メッツ	Metz	メッス	Metz
ミュルハウゼン	Mülhausen	ミュルーズ	Mulhouse
プファルツブルク	Pfalzburg	ファルスブール	Phalsbourg
ザールルイ	Saarlouis	サルルイ	Sarrelouis
ザールブルク	Saarburg	サルブール	Sarrebourg
シュトラースブルク	Straßburg	ストラスブール	Strasbourg
ツァーベルン	Zabern	サヴェルヌ	Saverne
ヴァイセンブルク	Weißenburg	ウィッサンブール	Wissenbourg

図1 アルザス＝モーゼル地域および隣接地域のドイツ語方言



図2 ウェストファリア条約(1648年)直前のエルザス

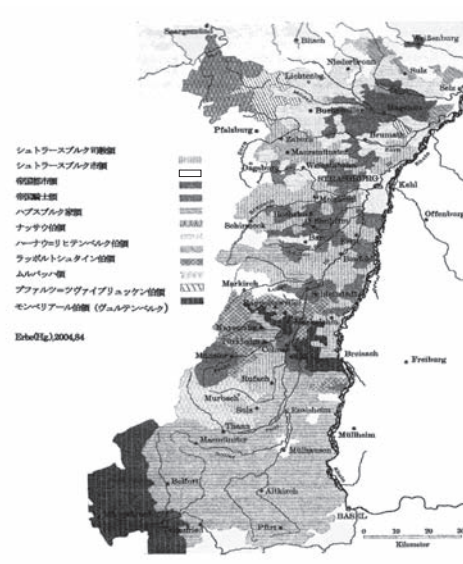
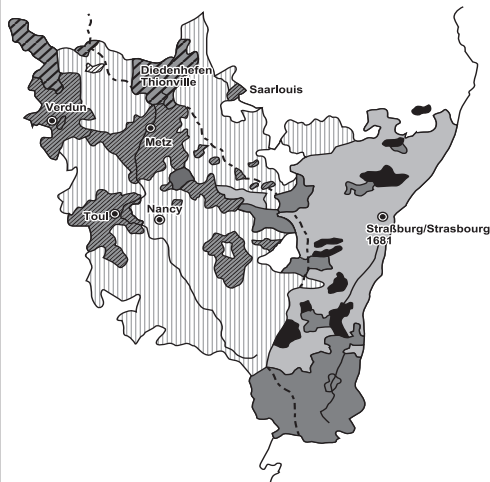


図3 フランス王国時代のアルザス・ロレーヌ併合



- ウェストファリア条約 (1648 年)
- 同 9 帝国都市と周辺地域高級裁判権
- 1713 年までのアルザス併合地域
- ロレーヌにおけるフランス王国取得地
- ルクセンブルク公国 (スペイン領ネーデルラント) 割譲地域
- 併合時点のロレーヌ公国
- 18 世紀ドイツ語 = フランス語境界線

資料) Westermanns Atlas zur Weltgeschichte, 1953, III, 114 ; Darby, H.C./Fullard, H.H.(eds.), New Cambridge Modern History History Atlas, 1978, 111. により、筆者作成

図4 新ドイツ帝国によるアルザス＝ロレーヌ併合 (1871 年)



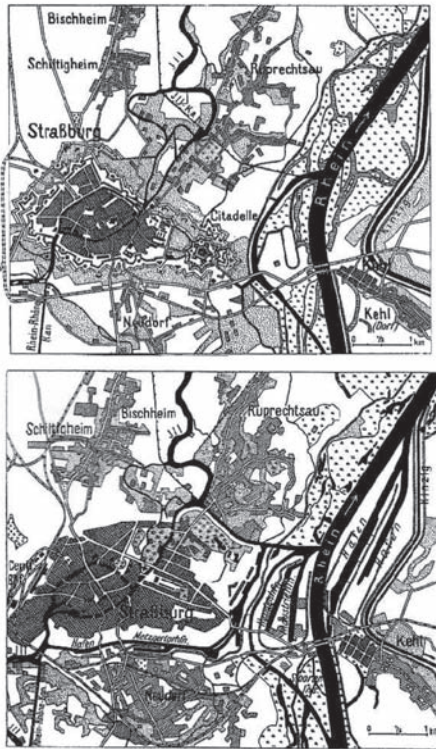
凡例

- 1. 鉄鉱床埋蔵推定地域
- 2. ドイツ語 = フランス語言語境界線
- 3. 1871 年の新独仏国境
- 4. 1789 年当時の年の独仏国境
- 5. 1815 年以降の独仏国境線
- 6. 1870 年当時のフランス県境
- 7. ドイツ領に編入されたモーゼル県、ムルト県諸郡

Sg=Sarrequeguines Sb=Sarrebouurg CS=Château-Salins

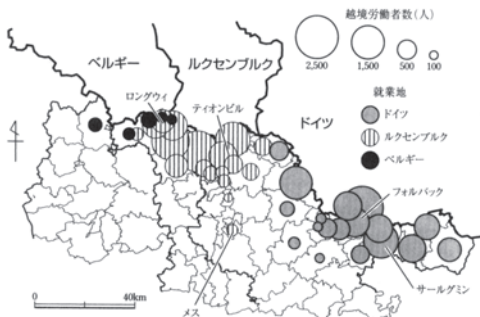
第 2 次パリ・講和条約による喪失地域
筆者作成

図5 ドイツ領時代のシュトラースブルク市の発展 1875-1913



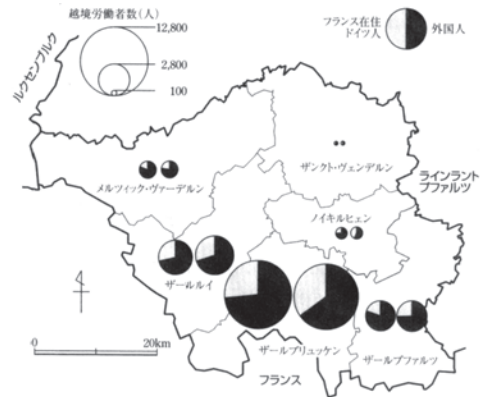
Schlenker(1931),634-35.

図7 ロレーヌにおけるカントン(小郡)別越境通勤労働者の分布(1990年)



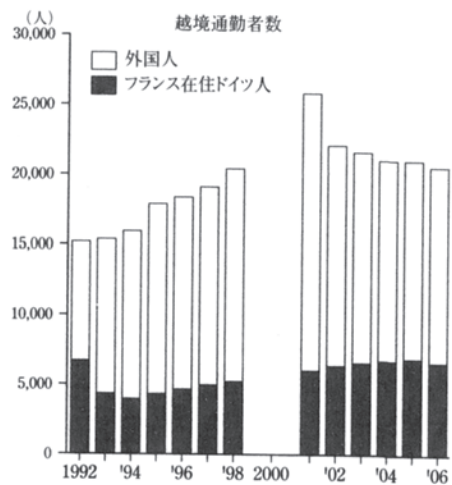
出典：手塚 / 呉羽 (2008)、150.
注 越境通勤労働者 100人以上

図6 ロレーヌからザールラントへの越境通勤労働者の就業地郡別国籍 / 居住国 (1998,2006年)



出典：手塚 / 呉羽 (2008)、150.
注：ルクセンブルクからの越境通勤労働者 (1998年 16人、2006年 26人を含む)
円は左が1998年、右が2006年

図8 ロレーヌからザールラントへの越境通勤労働者総数の推移



出典：手塚 / 呉羽 (2008)、154.

表1 ドイツ/フランス アルザス＝ロレーヌ関係基礎データ 1870年

	ド イ ツ	フランス	AL/EL	フランス 領ロレーヌ
面積万km ²	54.1	55.2	1.5	
人口 万人	40.8	36.9	1.6	
鉄工業				
鉄鉱石 千トン	2,580.8	2,600.0	500.0	141.0
銑鉄 千トン	1,390.0	1,192.0	205.0	78.6
錬鉄 千トン	1,040.0	767.0	127.0	6.7
綿業				
紡錘数(百万)	2.6	6.8	1.6	
織機(千台)	5.3	5.5	5.0	

表2 ドイツ/フランス、アルザス＝ロレーヌ関係基礎データ 1913年

	ド イ ツ	フランス	AL/EL	フランス領 ロレーヌ
面積万km ²	55.60	53.70	1.45	
人口 万人	6492.60	3765.30	187.40	
鉄工業				
鉄鉱石 千トン	27,580	21,500	21,136	19,979
銑鉄 千トン	19,309	4,207	3,870	3,493
鋼鉄千トン	18,399	4,642	2,263	2,298
綿業				
紡錘数(百万)	11.20	7.4	1.89	
織機(千台)	230	108	38	

表3 帝国領エルザス＝ロートリンゲン 宗派別人口分布(1910年 県別)

県	Unterelsaß		Oberelsaß		Elsaß合計	
宗派	実数	%	実数	%	実数	%
プロテスタント	243,858	35.51	73,033	14.26	316,891	26.00
カトリック	424,931	61.88	429,142	83.81	854,073	70.07
その他のキリスト教	1,436	0.21	1,396	0.27	2,832	0.23
ユダヤ教	16,182	2.36	8,361	1.63	24,543	2.01
総人口	700,938	100.00	517,865	100.00	1,218,803	100.00

県	Lothringen		帝国領合計	
宗派	実数	%	実数	%
プロテスタント	74,176	12.10	363,587	21.79
カトリック	533,389	86.60	1,391,181	76.22
その他のキリスト教	1,006	0.16	3,783	0.17
ユダヤ教	7,165	2.64	31,708	1.77
総人口	615,736	100.00	1,790,259	100.0

出典：Statistisches Jahrbuch für Elsaß-Lothringen, VII(1913/14), 20.

表4 帝国領エルザス=ロートリングン フランス語、イタリア語人口分布(1910年 県 郡別)

		フランス語母語		イタリア語母語	
県Bezirk	郡Kreis	実数	%	実数	%
Unterelsaß	Strassburg-Stadt	4,872	2.7	427	0.2
	Strassburg-Land	426	0.4	77	0.1
	Erstein	388	0.6	0	
	Hagenau	430	0.5	16	
	Molsheim	15,965	23.8	143	0.2
	Schlettstadt	3,698	5.5	101	0.1
	Weissenburg	113	0.2	3	
	Zabern	502	0.6	73	0.1
Oberelsaß	Altkirch	2,438	4.7	138	0.1
	Colmar	2,628	2.7	330	0.3
	Gebweiler	693	1.0	215	3.9
	Mülhausenn	5,454	2.0	1,491	0.8
	Rappoltsweiler	19,184	33.0	210	
	Thann	1,374	2.3	320	0.5
Lothringen	Metz-Stadt	13,757	21.1	614	0.9
	Metz-Land	52,292	46.0	4,388	3.9
	Bolchen	5,158	12.3	155	0.4
	Château-Salins	30,994	68.4	133	0.3
	Diedenhofen-Ost	5,216	8.3	2,335	3.7
	Diedenhofen-West	21,007	23.8	15,010	17.0
	Forbach	2,638	2.8	883	0.9
	Saarburg	14,141	21.4	238	0.4
	Saargemünd	894	1.3	111	0.1
全帝国領		204,262	10.9	27,434	1.5

出典：Statistisches Jahrbuch für Elsaß-Lothringen, VII(1913/14), 20.

表 5 オーバーライン圏の主要経済指標 2004年

	アルザス	スイス北西部	バーデン	南プファルツ
人口	1,793,886	1,343,885	2,416,152	303,347
人口密度	217	375	297	201
一人あたり GDPユーロ	24,713	36,131	27,946	22,026
就業人口(千人)	887	710	1,210	143
失業率 %	8.4	3.7	6.0	7.3
越境労働者 出	63,400	600	25,400	100
越境労働者 入	500	57,100	28,500	3,400

出典：EuroRegion Oberrhein, *Statistische Daten2006*.

表 6 オーバーライン圏の越境通勤労働者 2004年

	就労地域				
居住地域	アルザス	バーデン	南プファルツ	北西スイス	合計
アルザス	x	28,000	3,400	32,000	63,400
バーデン	300	x	?	25,100	25,400
南プファルツ	100	?	x		100
北西スイス	100	500		x	600
合計	500	28,500	3,400	57,100	89,500

出典：EuroRegion Oberrhein, *Statistische Daten2006*.

表7 アルザス地域における外国企業 国別企業・従業員数(1999年)

国・地域	全産業		製造業	
	企業数(社)	従業員(人)	企業数(社)	従業員(人)
ドイツ	588	35,396	207	23,368
ベルギー・ルクセンブルク	66	3,650	28	2,310
オランダ	64	4,633	22	2,890
イギリス	37	4,641	17	3,769
スカンディナヴィア諸国	33	1,621	10	847
イタリア	19	678	12	610
その他	34	1,472	10	680
EU合計	841	52,091	306	34,474
スイス	183	15,763	98	12,842
北米	87	20,307	48	18,306
日本	14	3,193	10	3,032
EU以外計	281	39,263	156	34,180
総計	1,125	91,354	462	68,654
ドイツ・スイス実数				
ドイツ	588	35,396	207	23,368
スイス	183	15,763	98	12,842
小計	771	51,159	254	47,022
総計	1,125	91,354	716	115,676
同比率(%)				
ドイツ	52.26	39.07	28.91	20.20
スイス	23.73	17.25	12.70	11.10
小計	75.99	56.32	41.61	31.30

出典：手塚/呉羽（2008），51

表8 Grossregion Sar-Lor-Luxの越境通勤労働者（2004年）

労働地	居住地					合計
	ザールラント	ロレーヌ	ルクセンブルク	ラインラント＝プファルツ	ワロニー	
ザールラント	x	21,100	40	21,800	70	43,010
ロレーヌ	1,000	x	200	100	130	1,430
ルクセンブルク	4,100	56,800	x	17,200	23,100	101,200
ラインラント＝プファルツ	12,000	2,300	120	x	160	14,580
ワロニー	0	3,600	300	100	x	4,000
合計	17,100	83,800	660	39,200	23,460	164,220

出典：手塚/呉羽（2008），148.

参考文献（抄）

1. 邦語文献

- 市村卓彦『アルザス文化史』（人文書院，2002年）。
- 宇京頼三『ストラスブール——ヨーロッパ文明の十字路——』（未知合，2009年）。
- 内田日出海『物語 ストラスブールの歴史——国家の辺境，ヨーロッパの中核——』（中公新書，2008年）。
- 大嶽幸彦『アルザス農村の歴史地理学的研究』（大明堂，1979年）。
- 金子 亨「アルザス語の現在」，同『少数民族言語のために』（草風館，1999年）所収。
- 蔵持不三也『ワインの民族誌』（ちくまライブラリー17，1988年）。
- 坂井一成著『ヨーロッパの民族対立と共生』（葦書房，2008年）。
- 滝田 毅『エルザスにおける軍民衝突——「ツァーベルン事件」とドイツ帝国統治体制——』（南窓社，2006）。
- 手塚 章「ヨーロッパ中軸国境地帯における空間組織の変容——アルザス・ロレーヌ地方を中心として——」『人文地理学研究』（筑波大学），27（2003年）。
- 手塚章/呉羽正明編著，『ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ』（二宮書店，2008年）。
第2章：多国籍企業の立地と地域経済（平 篤志） 第8章： グランドリージョン（Saar-Lor-Lux）国境地帯における人口流動（呉羽正昭），終章：統合ヨーロッパにおける国境地帯の将来と課題（呉羽正昭）。
- 鶴巻泉子「地域語と地域メディア——ブルターニュとアルザスの比較——」『ことばと社会』，4（2000年）。
- 鶴巻泉子「越境労働者と国民国家——アルザス地域の越境労働者からみたEU統合問題」宮島喬/若松邦弘/小森宏美編著『地域のヨーロッパ——多層化・再編・再生』（人文書院，2007年），273-95。
- 中本真生子『アルザスと国民国家』（晃洋書房，2008年）。
- 中力 えり「アルザスにおける言語教育運動の展開と変容——現代的文脈におけるエスニック運動の視点の再考——」『相関社会科学』第7号(1997年)，41-52。
- 西山暁義「郷土と祖国——ドイツ第二帝政期アルザス＝ロレーヌ民衆学校における『地域』——」『歴史評論』，2000年3月号，14-26。
- 西山暁義「世紀転換期ストラスブールの都市初等教育政策（1902－1908年）——『教育都市』の可能性と限界——」『共立 国際研究』第28号（2011年）。

- 新田俊三『アルザスからヨーロッパの文化を考える』（東京書籍, 1999年）.
- 保科孝一『エルザス・ロートリンゲン州の国語教育に関する調査報告』（朝鮮総督府, 1913年）.
- 三木一彦「アルザスにおける言語の現状とその地域性」『教育学部紀要』（文教大学教育学部）, 第37集, 2003年, 113-124頁.
- 宮島喬「コルシカとアルザス——ヨーロッパ統合下での民族地域の統合と分化——」『思想』第863号, 1996年8月, 48-65.
- 渡辺和行「アルザスとエルザス——ナシオンとフォルクのはざままで——」, 『香川法学』, 第16巻3・4号, 1997年.
- 渡辺 伸『宗教改革と社会』（京都大学出版会, 2001年）.

2. 邦訳

- ヴェックマン, アンドレ, 著, 宇京早苗訳『骰子のように——アルザス年代記』（三元社, 1997年）.
- オッフエ, フレデリック, 著, 宇京頼三訳『アルザス文化論』（みすず書房, 1987年）.
- ジオルダン, アンリ, 著, 原聖訳『虐げられた言語の復権——フランスにおける少数言語の教育運動』（批評社, 1987年）〔Giordan, H..(1984), *Par les langues de France*, Paris〕.
- シュヴァイツァー, アルベルト, 竹山道雄訳, 『わが生活と思想より』, （白水U ブックス, 2011年） 初版, 著作集, 第2巻, 1956年）〔Schweitzer, Albert, *Aus meinem Leben und Denken*, Felix-Meiner Verlag, Leipzig, 1931〕.
- ドーデ, アルフォンス, 大久保和郎訳「最後の授業」, 『月曜物語』所収, 旺文社文庫, 1968年.
- フィリップス, ウージェーヌ, 著, 宇京頼三訳『アルザスの言語戦争』（白水社, 1994年）.
- フィリップス, ウージェーヌ, 著, 宇京頼三訳『アイデンティティの危機』（三元社, 2007年）〔Philips, Eugène, *La crise d' identité. L' Alsace face à son identité*, Société d'Édition de la Basse-Alsace, 1978〕.
- リグロ, ピエール, 著, 宇京頼三訳『戦時下のアルザス・ロレーヌ』（白水社, クセジユ文庫）, 1999年.

3. 外国語文献

- Brentano, Lujo, *Elsässr Erinnerungen* (Berlin, 1917).

- Craig,J. E., *Scholarship and Nation Building. The Universities of Strasbourg and Alsatian Society, 1870-1939*,The University of Chicago Press,1984.
- Erbe, Michael (Hg.), *Das Elsaß. Historische Landschaft im Wandel der Zeiten* (Kohlhammer, Stuttgart,2002).
- Fisch, S. “Nation, ‘Heimat’ und ‘petite patrie’ im Elsaß unter deutscher Herrschaft”, Bellabarba, M. /Stauber, R. (Hg.), *Territoriale Identität und politische Kultur in der frühen Neuzeit* (Berlin, Duncker und Humblot, 1998) , 359-73.
- Fischer,C.J., *Alace to Alsations? Visions and Division of Alsatian Regionalism,1870-1939* (Berghahn; New-York-Oxford,2010).
- Fontane,T., *Aus den Tagen der Okkupation ; Eine Osterreise durch Nordfrankreich und Elsaß-Lothringen*, 1871 (Berlin : Verlag der Nation, 1984) .
- Gras,S., “Regionalism and Autonomy in Alsace since 1918” ,in: Stein,R./Urwin,D. (eds.), *The Politics of territorial identity: Studies in European regionalism* (London-Beverly Hills; Sage Publication, 1982), 309-54.
- Heuss-Knapp, Elly, *Ausblick vom Münsterturm. Erinnerungen*(Berlin,1934; 2. Aufl., Stuttgart, 2008).
- Igersheim,F., *L’ Alsace des notables 1870-1914. La bourgeoisie et le peuple alsacien*(Strasbourg,1981).
- Interregionale Arbeitsmarktbeobachtungsstelle,*Grenzgänger und grenzüberschreitender Arbeitsmarkt in der Großregion*, INFO- Institut, Saarbrücken 2005.
- Kiener,F.,*Die elsässische Bourgeoisie* ,2.Aufl., Straßburg, 1910.
- Kramer,Alan, “Wackes at war: Alasce-Lorraine and the failure of German national mobilization, 1914-1918” , Horne,John(ed.), *States,Society and mobilization in Europe during the First World War*, Cambridge U.P.1997,105-21.
- Juillard, É.,*Atlas et géographie de l’Alsace et de la Lorraine : la France rhénane* ,Paris,1977.
- Leitner,Mathias Ernst, “Der Kreis um den Straßburger Ökonomen Georg Friedrich Knapp vor dem Ersten Weltkrieg” , *Jahrbuch zur Liberalismus-Forschung*,V(1993),162-175.
- L’Huillier,F.(éd.),*L’Alsace 1870-1871* (Strasbourg,1971).
- MacGilllicuddy,Àine, *René Schickele and Alsace. Cultural Identity between the Borders* (Peter Lang,Bern 2011).
- Mayeur, Jean-Marie, *Autonomie et Politique en Alsace. La Constitution de 1911*

- (Paris; Arman Colin, 1970).
- Michna,R., “Deutsche Zuzügler im südlichen Elsaß . Probleme der Europäisierung des Immobilienmarktes” , *Regio Basiliensis*, 43(2002), 125-137.
 - Müller,Thomas, *Imaginerter Westen: Das Konzept des » deutsche Westraums*
《 im völkischen Diskurs zwischen Politischen Romantik und Nationalsozialismus,
Bielefeld,Trasncrypt-Verlag, 2009.
 - Pennera,Christian, *Robert Schuman: la jeunesse et les débuts politiques d'un grand européen de 1886 à 1924* (Sarreguemines:Édition Pierron,1985).
 - Preibusch,, S. C., *Verfassungsentwicklungen im Reichsland Elsaß-Lothringen 1871-1918. Integration durch Verfassungsrecht?* (Berlin; BWV, 2006).
 - Rehm, Max,*Rudolf Schwander und Kurt Braum. Wegbahner neuzeitlicher Kommunalpolitik aus Elsaß* (Stuttgart,1974).
 - Rehm, Max, *Straßburgs geistige Luft um die letzte Jahrhundertwende. Grenzlandschicksal des Elsaß* ,2. Aufl., (Bad Neustadt a.d. Saale,1984).
 - Roth,F.,*Alsace-Lorraine. Histoire d' un 《Pays Perdu》 de 1870 à nos jours*(Nancy, Éditions Place Stanislas, 2010).
 - Richez,J.C./Wahl,A., *La vie quotidienne en Alsace entre France et Allemagne 1850-1950* (Hachette, Paris, 1993) .
 - Rothenberger,K.H., *Die elsaß-lothringische Heimat- und Autonomiebewegung zwischen beiden Weltkriege* (Europäische Hochschulschriften, Reihe 3, Bd. 42), Peter Lang, Frankfurt a.M./München,1976.
 - Schlenker M.(Hg.), *Die wirtschaftliche Entwicklung Elsaß-Lothringens 1871-1918.*
(Wissenschaftliches Institut der Elsaß–Lothringer im Reich an der Universität Frankfurt am Main(Hg.),*Das Reichsland Elsaß-Lothringen* , Frankfurt a. M., 4 Bde., 1931-1934, Bd. 1) .
 - Statistisches Bureau des Kaiserlichen Mininsiteriums für Elsaß-Lothringen, *Statistisches Jahrbuch für Elsaß-Lothringen*, Straßburg, Straßburger Druckerei und Verlagsanstalt, Jrg.1-7,1907-1914 .(St.JBと略).
 - Stroh,C., *Sprachkontakt und Sprachbewußtsein . Eine soziolinguistische Studie am Beispiel Ost-Lothringens*,Tübingen,1993.
 - Vidal de la Brache, P., *La France de l' Ést (Lorraine-Alsace)* (Paris, 1920, Présentation d' Yves Lacoste, Paris, Édition de Découverte, 1994).

- Wehler,H.-U., “Elsaß-Lothringen von 1871 bis 1918. Das Reichsland als politisch-staatrechtliches Problem des zweiten deutschen Kaiserreichs” , *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins* ,109(1961), 133-99, in: Ders., *Krisenherde des deutschen Kaiserreichs, 1871-1918. Studien zur deutschen Sozial- und Verfassungsgeschichte*, 2. überarb. u. erw. Aufl., 1979, Göttingen; Vandenhoeck und Ruprecht.
- Wissenschaftliches Institut der Elsaß－Lothringer im Reich an der Universität Frankfurt am Main(Hg.),*Das Reichsland Elsaß-Lothringen* , Frankfurt a. M., 4 Bde., 1931-1934.
- Wittich,Werner, “Deutsche und französische Kultur im Elsaß” ,*Illustrierte elsässische Rundschau*, III (1900), 71-92, 113-140, 177-216, Neudruck, Straßburg ; Schlesier & Schweickhardt,1902.
- Wittich,Werner, “Kultur und Nationalbewußtsein im Elsaß” , *Illustrierte elsässische Rundschau*, XI (1908), 24-36.
- Wolfram,G./Gley,G.(Hg.), *Elsaß-lothringischer Atlas* ,Frankfurt a.M.,1931.
- Woytt, Gustav, “Kultur- und Sprachpolitik in Elsaß-Lothringen während der Reichslandzeit (1871-1918). Dokumente und Erinnerungen” , *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins* ,139(1991),
- Zimmermann, Bénédicte, “Naissance d'un politique municipale du marché du travail. Strasbourg et la question du chômage (1888-1914)” , *Revue d'Alsace*,120 (1994), 209-234.